

かに

KANI



公益財団法人 がん研究振興財団

第51号 2024

表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語の Cancerは、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる；国立がんセンター第3代総長)

公益財団法人がん研究振興財団の概要

沿革

- 昭和40年12月 「がん研究振興会」として発足
- 昭和43年 9月 厚生省より「財団法人がん研究振興会」として認可
- 昭和59年 3月 寄付行為改正により「財団法人がん研究振興財団」に名称変更
- 平成24年 4月 内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可
(公益認定)

設立の経緯

遡ること約半世紀前の「がん」の状況は、社会においても家庭においてもかけがえのない立場にある年齢層の人達の健康にとって最大の脅威となっており、医学の進歩をもってしてもなお、未知の分野を多く残していました。

国のがん対策は、昭和37年我が国初のがん専門病院として国立がんセンターが開設され、専門的な研究、診断、治療が行われました。

当財団の設立に当っては、「がん」について医学的にも未知の分野が広く、研究すべきことが山積した状況の中で、官民一体となり、国費のほか一般の方々からの浄財を以てがんの治療、予防技術の開発事業を行うため、昭和40年12月「がん研究振興会」として発足し、その後昭和43年9月、初代会長に経済団体連合会会長であった石坂泰三氏、副会長に富士銀行頭取の岩佐凱實氏、理事長に八幡製鉄副社長藤井丙午氏、常務理事に経済団体連合会専務理事花村仁八郎氏による経済界を挙げての組織体制により厚生省から財団法人として認可設立されました。

昭和59年度からは、国による「対がん10か年戦略」に伴う事業を実施するため、昭和59年3月名称を「財団法人がん研究振興財団」と改め、推進事業を30年に亘り実施して参りました。

また、平成24年4月に内閣総理大臣から全事業を公益事業とする公益認定を受けております。

事業内容

- (1) がん研究に関する研究の助成
- (2) がん研究に関する国際協力及び国際交流
- (3) がん研究に関する若手研究者の育成
- (4) がん研究に関する国民への情報発信
- (5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力
- (6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業

がん研究振興財団の変遷

年月日	事 項	内 容
昭 40.12. 1	任意団体 「がん研究振興会」設立	昭和 37 年国立がんセンターが開設されて以来、多数の方々からがん研究振興にと寄せられた浄財を最も有効に具現する方法として、国立がんセンターのみならず、その他の研究機関に於いても活用できるように、とりあえず任意団体として設立。
昭 43. 9. 2	公益法人 「財団法人がん研究振興会」設立 1. 会 長 石坂 泰三 副 会 長 岩佐 凱實 理 事 長 藤井 丙午 常任理事 花村仁八郎 2. 基本財産 2,000 万円 3. 本会の目的 がんその他の悪性新生物（以下「がん」という）に関する研究を助長奨励すると共に、これら疾患の最新の診断治療方法の普及を促進し、もって国民の健康と福祉の増進に寄与する。 4. 本会の事業 (1) 「がん」に関する研究 (2) 「がん」に関する診断治療技術の開発の助成 (3) 「がん」の研究者および診断治療に関する技術者の教育訓練の実施の助成 (4) 「がん」に関する情報の提供 (5) 「がん」に関する内外諸団体との連絡および協力 (6) その他の目的を達するために必要な事項	新財団の設立については、既存の団体との調整の問題もあり、若干紆余曲折はあったが、石坂泰三氏、岩佐凱實氏、藤井丙午氏、長沼弘毅氏、花村仁八郎氏等のご斡旋によって財界方面の協力が得られるめどもつき、また監督官庁の了解も得られて発足。 本会は、本会の目的に賛同された団体又は個人の賛助会員によって拠出される会費によって維持されることになっているが、このほか、患者又はその家族による篤志寄附もある。さらに最近では、がんの問題に関心を持たれた一般の方々による篤志寄附がある。このような情勢に備えて、本会は所得税法及び法人税法による免税措置の対象となる法人（科学技術に関する試験研究を行う者に対する助成金の支給を主たる目的とする法人）として認可された。
昭 59. 1.26	天皇皇后両陛下よりご結婚 60 周年を記念して御下賜金が厚生大臣より下賜された。	御下賜金を核として各界からの浄財を募って、がん対策振興基金（目標 10 億円）を造成する。
昭 59. 3. 1	財団法人がん研究振興財団に名称変更寄附行為の一部変更認可。 1. 会 長 岩佐 凱實 理 事 長 山本 正淑 常任理事 花村仁八郎 2. 基本財産 1 億 3,100 万円 3. 本財団の目的 がんその他の悪性新生物（以下「がん」という）に関する研究を助長奨励すると共に、これら疾患の最新の診断治療方法の普及を促進し、もって国民の健康と福祉の増進に寄与する。	昭和 58 年 6 月 7 日、中曽根総理大臣が提唱された「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業が、がん対策関係閣僚会議において閣議決定された。 これら事業の一翼を担うこととなり、昭和 59 年 3 月 1 日、寄附行為の一部変更が認可された。 従来事業の他に「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業として 7 つの特別会計事業を実施。

年月日	事 項	内 容
昭 59. 3. 1	<p>4. 本財団の事業</p> <p>(1) がんその他の悪性新生物に関する研究の助成</p> <p>(2) がんその他の悪性新生物に関する診断治療技術の開発の助成</p> <p>(3) がんその他の悪性新生物に関する研究の国際協力及び国際交流</p> <p>(4) がんその他の悪性新生物の研究者及び診断治療に関する技術者の育成</p> <p>(5) がんその他の悪性新生物に関する研究の推進のための支援</p> <p>(6) がんその他の悪性新生物に関する情報の提供</p> <p>(7) がんその他の悪性新生物に関する内外諸団体との連絡及び協力</p> <p>(8) その他この財団の目的を達成するために必要な事業</p>	
昭 59. 8. 9	高松宮妃殿下よりがん研究振興のためにと金一封を賜る。	
昭 60. 8.31	国際研究交流会館竣工	<p>国際研究交流会館は、「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業の円滑な実施のために活用することを主眼として自転車振興会補助事業の助成により完成した。</p>
平 24. 4. 1	<p>内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可</p> <p>1. 会 長 大竹 美喜 理 事 長 高山 昭三 専務理事 北井 暁子</p> <p>2. 基本財産 22 億円</p> <p>3. 目 的 本財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を奨励するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的とする。</p> <p>4. 事 業</p> <p>(1) がん研究に関する研究の助成</p> <p>(2) がん研究に関する国際協力及び国際交流</p> <p>(3) がん研究に関する若手研究者の育成</p> <p>(4) がん研究に関する国民への情報発信</p> <p>(5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力</p>	<p>(定款 附則)</p> <p>1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第 106 条第 1 項に定める公益法人の設立の登記の日から施行する。</p> <p>2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第 106 条第 1 項に定める特例民法法人の解散の登記と公益法人の設立の登記を行ったときは、第 8 条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。</p> <p>3 本財団の最初の代表理事（会長）は河野俊二、代表理事（理事長）高山昭三、業務執行理事（専務理事）は北井暁子とする。</p>

年月日	事 項	内 容
平 24. 4. 1	<p>(6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業</p> <p>前項の事業は本邦及び海外において行う。</p>	<p>4 本財団の最初の評議員は、次に掲げる者とする。</p> <p>荒蒔康一郎 栗山 泰史 佐藤 禮子 下遠野邦忠 田島 和雄 中釜 齊 中川原 章 野田 哲生 宮園 浩平</p>
平 29. 4. 1	がん研究振興財団事務所移転	<p>(旧) 東京都中央区築地5-1-1 国際研究交流会館内 (新) 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階</p>
令 3. 10. 1	患者本位の「がん情報サイト」開設	<p>財団HPにて公開。 https://www.fpcr-joho.jp/</p> <ul style="list-style-type: none"> • 公表がん種： <ul style="list-style-type: none"> 非小細胞肺癌（令3.10.1公開） 血液がん（令4.7.1公開） 乳がん・子宮頸がん（令5.1.1公開） • 公開情報からの検索システム構築（令5.1.1導入）
令 5. 10. 23	全 12 領域の企業治験情報の登録完了及び総合検索情報システムの開設	<ul style="list-style-type: none"> • 全12領域の企業治験情報（総ID数約500件）の登録（令5.10.23公開） • 医療機関別治験情報（令5.10.23公開） • 小児及びAYA世代のがん、希少がん、原発不明がん、支持療法や緩和ケアの治験情報（令6.1.22公開）

巻頭言

がん研究10か年戦略（第5次）

国立がん研究センター 理事長 中 釜 齊 6

トピックス

がん研究10か年戦略（第5次）の概要 8

特集1 令和5年度がん研究シンポジウム

「次世代の抗がん剤開発」開催のご報告

国立がん研究センター中央病院 副院長 山 本 昇 9

特集2 令和5年度がんサバイバーシップ研究成果発表会開催報告

埼玉医科大学 医学部社会医学 教授 亀 井 美登里 12

令和5年度がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告

～「がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して」～

公益財団法人 がん研究振興財団 専務理事 石 塚 正 敏 15

令和5年度事業実績

がん情報提供支援事業運営委員会報告 上 田 龍 三 20

がん研究助成審議会報告 村 上 善 則 23

H O P E 事業等運営委員会報告 上 田 龍 三 30

がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会報告 亀 井 美登里 33

海外派遣研究助成委員会報告 関 谷 剛 男 36

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会報告 桑 原 節 子 41

事業実績1984～2023 43

令和6年度事業計画 57

ご寄付芳名録 60

役員・評議員・顧問名簿 61

あとがき 62

がん研究10か年戦略（第5次）



国立がん研究センター
理事長 中釜 斉

日本のがん対策における本格的な研究事業は、日本人の死亡原因の一位が悪性新生物（がん）となった1981年の直後の1984年からの「対がん10か年総合戦略」（1984-1993年）に始まる。その後、「がん克服新10か年戦略」（1994-2003年）、「第3次対がん10か年総合戦略」（2004-2013年）へと引き継がれてきた。2014年からは新たに「がん研究10か年戦略」（2014-2023年）が策定されて、国家的事業としての戦略的ながん研究が推進されてきた。この間、2006年にはがん対策基本法（以下、基本法）が策定され、患者及び国民の視点からのがん対策上の課題に対して、予防・診断・治療の技術向上と研究成果の普及・活用により、国、地方公共団体、国民、医師等が一体となったがん対策を「がん対策推進基本計画」（以下、基本計画）を定めて、総合的かつ計画的に推進することが打ち出された。基本法は2016年に改正され、がん患者の就労等の社会的な課題への取り組みと、がんに関する教育推進の二つの柱が新たに加えられている。

がん研究を「がん研究10か年戦略」等により戦略的に推進するとともに、社会全体として総合的かつ多角的なアプローチによりがんの克服

を目指す「基本計画」と並行して国全体として推進することにより、日本のがん対策は着実な成果を上げることができた。特に、2000年に入ってから、がんの生物学的な本態解明の研究成果に基づき、数多くの分子標的薬の開発が日本を含めて世界中で精力的にすすめられた。2010年代に入ると、「ゲノム情報に基づいたがん患者の治療層別化」に基づき、より効果的な治療法や新たな医療シーズの開発が精力的に進められることとなった。我が国では多遺伝子パネルを用いたがんの包括的ゲノムプロファイリング検査（CGP検査）が2019年6月から保険診療として可能になり、本格的な「がんゲノム医療」の時代を迎えている。2015年以降には、新たな治療モダリティとして「免疫チェックポイント阻害剤」や「CAR-T細胞療法」などの免疫系の治療法が次々に開発・医療実装され、がんに対する治療法の開発は大きく展開することとなった。「がん研究10か年戦略」（2014-2023年）および「がん対策推進基本計画」（第2～第3期；2012-2022年）を並行して推進することで日本のがん対策は飛躍的な展開を遂げることができたが、一方で新たな多くの課題も見えてきた。希少がん・難治がんの生存率の改善は未だ限定的であり、小児・AYA世代がんや高齢者

のがんに対する治療薬の開発や治療法の最適化には課題が山積している。さらに、新たなドラッグ・ドラッグロスの問題が表出しており、がん医療提供の地域間・地域内における格差などの医療実装上の課題も指摘されている。

これらの課題に対してより重点的に取り組むべく、「第4期がん対策推進基本計画」が2023年に策定された。第4期基本計画では全体目標として、「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す」ことが掲げられた。「がん予防」、「がん医療」、「がんとの共生」への取り組みが3つの大きな柱として立てられている。さらに、これらの取り組みを支える「基盤」としての、「全ゲノム解析等の新たな技術を含む更なるがん研究の推進」が書き込まれている。「第4期基本計画」を着実に遂行し、計画の目的を達成するための研究計画として、今年度（2024年）からは新たに「がん研究10か年戦略（第5次）」が始まった。

「がん研究10か年戦略（第5次）」では、研究の方向性として、省庁および産官学の連携をこれまで以上に強力に推進し、がん患者を含む全ての国民とともに、基礎研究、臨床研究、政策研究を戦略的かつ一体的に推進することとされている。具体的な研究事項としては、第4期基本計画に対応する形で、「がんの予防」、「がんの診断・治療」、「がんとの共生」、「希少がん・難治がん、小児・AYA世代がん、高齢者がん等の各ライフステージのがんの特性解明」に資する研究の一層の充実が求められている。「がん予防」領域では、遺伝子多型等の遺伝情報に基づいた個々人のリスク評価とその有効性評価や、正常組織におけるゲノム変異細胞のクロー

ン進化と発がん性との関連性の解明に基づいた個別化予防技術の開発が期待される。「診断・治療」領域においては、難治性がんの本態を踏まえた新規薬剤・治療法が開発が期待されている。また、リキッドバイオプシー等の新規の技術を取り入れた治療法の個別化・精緻化、AI・量子センサー等の新規技術、核医学薬品や様々な武装化抗体、二重特異性抗体、T細胞エンゲージャーを初めとした遺伝子改変T細胞療法などの新たな細胞療法が開発が期待されている。「がんとの共生」領域においては、相談支援・情報へのアクセシビリティの向上やサバイバースUPPORT支援の一層の充実、心理・社会的な様々な格差への対応等が求められている。

これらの各領域の課題を迅速かつ迅速に解決するために、分野横断的な研究の推進として、「がんの本態解明」、「バイオバンク・データベースの整備・連携強化、および利活用促進」などが重点的に取り組むべき課題として取り上げられている。研究成果の早い医療実装が求められていると言える。さらに、今後10年において、医療・健康情報やゲノム情報を含むマルチオミックス情報の医療DX等の新規技術開発によるリアルワールドデータ（RWD）の統合的解析や分散型臨床試験（DCT）の体制整備によるアンメットニーズの高いがん種に対する新規治療法開発とそれらの成果の医療実装への大きな展開が期待される。膨大なRWDを解析するための医療AI技術や生成AI等の情報科学分野の研究開発の急速な加速も期待され、今後10年に求められるがん医療技術の革新的進歩を支える盤石な研究基盤を構築するためにも、分野横断的研究や異分野融合科学（convergent science）の推進によるがん研究の一層の飛躍が期待されている。

がん研究 10 年戦略（第 5 次）の概要

令和 5 年 12 月 25 日大臣確認（内閣府、文部科学省、厚生労働省、経済産業省）

戦略目標

がん患者を含む全ての国民と協働した研究を総合的かつ計画的に推進することにより、「がん予防」、「がん医療」及び「がんとの共生」の各分野のより一層の充実を実現し、がん対策推進基本計画の全体目標（「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す」）を達成することを目指す。

今後のあるべき方向性

今後のがん対策の方向性を踏まえ、社会実装を意識したがん研究の取組を進めていく。がん研究全体として、長期的視点を持って研究成果を産み出すために、省庁連携のみならず、産官学が連携し、がん患者を含む全ての国民とともに、基礎研究、臨床研究、政策研究のそれぞれを戦略的かつ一体的に推進していく。

今後推進すべきがん研究・開発（具体的研究事項）

（1）「がんの予防」に関する研究

- (1-1) 新たなリスク要因の同定やリスク層別化に基づく 1 次予防の推進
- (1-2) 高リスク層の同定や新たな早期発見手法の活用による 2 次予防の推進

（2）「がんの診断・治療」に関する研究

- (2-1) 個別化医療を更に推進する診断技術の開発
- (2-2) 新規薬剤・治療法の開発
- (2-3) 多様な患者ニーズに応じた新たな標準治療の確立

（3）「がんとの共生」に資する研究

- (3-1) 誰もがアクセス可能な相談支援・情報提供
- (3-2) 充実したサバイバーシップの実現

（4）ライフステージやがんの特性に着目した研究

- (4-1) 希少がん及び難治性がん
- (4-2) 小児がん及び AYA 世代のがん
- (4-3) 高齢者のがん

（5）がんの予防、がんの診断・治療の開発、がんとの共生を促進するための分野横断的な研究

- (5-1) がんの本態解明
- (5-2) シーズ探索・育成
- (5-3) バイオバンク・データベースの整備、連携強化及び利活用促進
- (5-4) 先端的な科学技術の活用や異分野融合
- (5-5) 政策的な課題の把握と解決

研究の効果的な推進のための環境整備

- ✓ **国際連携** 国際共同臨床試験の環境整備、海外データベースとの連携とその活用等
- ✓ **人材育成** 幅広い分野の知識を身に付けたがん研究に関わる人材の育成、若手・女性研究者や博士号取得者の活躍の場の拡大等
- ✓ **患者・市民参画** 他疾患や他領域の視点も広く交えた主体的な参画の推進等

注：厚生労働省ホームページより転載

令和5年度がん研究シンポジウム 「次世代の抗がん剤開発」開催のご報告



国立がん研究センター中央病院
副院長
山本 昇

1. はじめに

令和6年3月8日土曜日に国立がん研究センター研究棟・大会議室にて、令和5年度がん研究シンポジウムを開催させていただきました。これまで演者、聴講者としての参加経験はありましたが、組織委員長としての参画は初めてのことであり、がん研究振興財団の皆様にも多大なる御支援をいただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

今回は自身が新規抗悪性腫瘍薬の早期開発に携わっていることもあり、「次世代の抗がん剤開発」と銘打って、各領域の臨床開発の第一人者ともいえる研究者に登壇いただくとともに、その開発における注意点、および具体的な臨床開発の場となる治験情報共有についても専門家からご講演をいただき、議論を交わすことができました。がん研究振興財団の堀田知光理事長からのご挨拶でスタートしたシンポジウムは、現地参加としては、30名にとどまりましたが、COVID-19時代に構築されたオンライン併催の恩恵もあり、370名を超える事前登録がありま

した。また、本シンポジウム開催においては、医薬品医療機器総合機構（PMDA）の後援をいただきました。

2. 講演内容のご紹介

ADC製剤：創薬テクノロジーの飛躍的進歩によって抗体薬物複合体（ADC製剤）の開発は近年急速に増加、複数の薬剤が上市され、標準的治療に組み込まれる時代に入っています。和歌山県立医科大学・**清水俊雄先生**より、ADC製剤の開発状況および開発における注意点などをご講演いただきました。ADC製剤は、標的同一に係わる抗体部分、抗体と抗がん剤を連結するリンカー部分、抗体部分に結合させる抗がん剤（ペイロード）から構成されていますが、各部において高い有効性・安定性・機能性が求められています。また、将来的な開発の方向性（単剤、併用など）につい



でもご紹介をいただきました。

T-cell engager (Bite製剤)：ADC製剤同様に、創薬テクノロジーの進歩は免疫系に作用する抗体製剤の開発にも劇的な変革をもたらしました。国立がん研究セ



ンター東病院・久保木恭利先生より現在の開発状況および副作用対策についてご講演をいただきました。Tリンパ球上のCD3に作用する部分と、特定のがん表面抗原に作用する部分で構成されるBite製剤は、海外では造血器系悪性腫瘍を中心に複数薬剤が承認されていますが、日本での開発はかなり遅れを取っています。薬剤開発を進めていく上で、target engagementはもちろんのこと、特徴的な副作用であるサイトカイン放出症候群などへの対応方法についてもご紹介をいただきました。



低分子化合物：ADC製剤、Bite製剤などの開発が活発にはなっていますが、低分子化合物の開発は依然として薬剤開発の中心的役割を担っています。愛知

県がんセンター・藤原豊先生から肺がんを中心に低分子化合物の開発経緯から、最近注目されている新規化合物についても紹介をいただきました。肺がんに対する低分子化合物としては、EGFR遺伝子変異に対するEGFR-TKI、ALK融合遺伝子に対するALK-TKIが有名ですが、最近では、KRASなどに代表されるいわゆるundruggableとされる標的に対しても低分子化合物の開発が進められていることについてもご紹介をいただき

ました。

細胞療法（固形がんにおけるCAR-Tを中心に）：リンパ腫に対するCAR-T療法の劇的な効果は十分に認知されていますが、固形がんに対しては



はじめとする細胞療法の開発は地道に進められています。国立がん研究センター中央病院・小山隆文先生から固形がんに対するCAR-T療法の開発状況について講演をいただきました。CAR-T療法は固形がんに対しても注目されている治療法ではあるものの、その開発の困難さと、次世代のCAR-NK細胞療法についてもご紹介をいただきました。



Dose optimization：有効な分子標的薬剤は、おのずと長期間投与することが想定されますが、その中で継続が困難となり投与量減量・休薬が必要な場面が散見されます。

2023年にFDAからDose optimizationに関するガイダンスが発表され、薬剤開発に大きな変革もたらされました。実際の方向性については試行錯誤が続いている印象がありますが、この課題に対してPMDA経験者でもある国立がん研究センター中央病院・佐藤潤先生より、dose optimizationに至る背景とともに現在の考え方についてご講演をいただきました。

抗悪性腫瘍薬におけるヒト初回投与量について：新規開発薬剤をヒトに初めて投与するfirst in human試験においては、初回投与量設定は困難を極める場合が多々あると想定されます。こ



の初回投与量における基本的な考え方についてPMDA・新薬審査第五部・**平林啓司先生**からヒト初回投与量の基本的な考え方についてガイドラインを交えて

解説いただくとともに、最近、開発が増えているADC製剤、T-cell engagerなどに対する対応についてもご講演をいただきました。

Webサイトにおける治験情報の動向について：数多くの治験を実施してもその情報が患者さん側に提供・共有されなければ、患者さんの参加が進まないこ



とは自明です。国立がん研究センター・がん対策情報センター本部・**若尾文彦先生**より、Webサイトを利用した治験情報の提供方法について現状、課題についてご紹介をいただきました。以前は治験情報の共有において多くの課題があると思い込んでいましたが、現在の情報提供レベルが大幅に向上していることを再認識できる貴重な講演でした。

3. 最後に

わずか半日のがん研究シンポジウムでしたが、濃密かつ刺激的な講演内容であり、今後の新規抗悪性腫瘍薬開発を考える上で大いに参考になる情報を得ることができました。また、最後には垣添忠生がん研究振興財団会長のご挨拶をいただき閉会となりました。

最後にあらためて、素晴らしいご発表をいた

だきました演者の皆様、堀田理事長をはじめとするがん研究振興財団の皆様、ご後援をいただいたPMDAの皆様、そしてご参加くださった皆様に心より御礼申し上げます、本シンポジウムのご報告とさせていただきます。

令和5年度 がんサバイバーシップ研究成果発表会 開催報告



埼玉医科大学 医学部社会医学
教授 亀井 美登里
(がんサバイバーシップ研究成果発表会評価委員長)

令和6年2月16日（金）に国立がん研究センター研究棟セミナールームにおいて令和5年度がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナー（現地・オンライン併用）が開催されました。

今年度の参加者は100余名と人数的には若干小規模ではありましたが、北海道から沖縄まで各地の医療従事者やがん経験者ご本人、患者会関係者、企業関係者、行政関係者など、その背景は多岐にわたり、皆さんとても熱心に聴講されていました。

本稿では「第1部 がんサバイバーシップ研

究成果発表会」について報告します。

発表会は評価委員会を兼ねておりましたが、がんサバイバーシップに関連する様々な問題について多くの方々と認識を共有したいとの考えから毎回一般の方々にも公開し、研究成果発表会として開催しています。

令和4年度にがんサバイバーシップ研究助成を行った5課題（5名）の研究成果発表要旨は次のとおりです。

【研究成果発表要旨】（発表順）

1. 新垣 理宣（東北大学病院 周術期口腔健康管理部）



「がんサバイバーを薬剤関連顎骨壊死から守る医科歯科連携および地域連携の支援ツールの開発」

薬剤関連顎骨壊死は難治性であり、骨吸収抑制薬投与開始前からの予防的な対応が重要です。本研究では骨吸収抑制薬の投与を受けるがん骨転移患者の口腔管理の現状を明らかにするために、11施設のがん専門病院の歯科医師にアンケート調査を実施しました。骨吸収抑制薬投与開始前の口腔管理の方向性は各施設で概ね一致していましたが、投与開始後の口腔管理はばらつきが認められました。本研究結果をもとに、がん骨転移患者さんが安心して生活を行える口腔支援ツールを開発し、社会実装に向けて検討する予定です。

2. 笠井 敬太 (日本学術振興会特別研究員)



「小児がん経験者のサバイバーシップ支援に向けた社会学的研究：経験者がサバイバーになる過程に注目して」

本研究では対象者への調査を通して、小児がん経験者がサバイバーとなる過程を捉えた。小児がん経験者は幼少期の罹患であること、さらに抱える疾患が「がん」であることから二重の保護状態に置かれ、周囲に代弁者がいる環境で生活を送るため、自らが抱える問題を解決する主体と想定されない。しかし就労状態にある対象者は、経験者同士の相互行為を通して問題経験を「認識」「言語化」することで、自らが経験する問題の主体となろうとしていた。こうした自らの病の主体という視点は、小児がん経験者のサバイバーシップに向けた支援を考えるうえで有効なものとなる。

3. 中谷 菜々美 (東海大学 医学研究科先端医科学専攻)



「終末期医療を受けるがん患者に対する回想法を用いた音楽療法の開発」

音楽療法の技法であるソングライティングは、過去の報告から終末期がん患者に特に好まれ、有益であると予想されるが、その技法については探索の余地があると指摘されている。本研究では回想法とソングライティングを組み合わせた新たな音楽療法を開発し、有効性を検討する。

短期回想法の質問内容に沿って対話し、その内容から曲を作成する。患者は介入の度に同じ質問について語り、研究者と共に歌詞を熟慮する。終末期医療を受けるがん患者を対象とし、目標症例数は18例である。現在2人の対象者への介入が終了し、スピリチュアリティ、不安、抑うつに改善の傾向が見られ、肯定的な感想をいただいている。

4. 平山 貴敏 (国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科)



「AYA世代がんサバイバーに対するePROシステムを活用したスクリーニング法の開発」

AYA世代がんサバイバーに対するePROシステムを活用したスクリーニングと先行研究の紙面でのスクリーニングの回答割合、回答時間、多職種専門家につながった割合をそれぞれ後ろ向き観察研究で比較した。回答割合は93.8%で紙面より高く、多職種専門家につながった割合も紙面での

スクリーニングより有意に高かった(32.7% vs 18.0%)。本結果は、速やかな情報共有と必要なニーズに対する支援の早期導入のためのAYA世代がんサバイバーに対するePROシステムを活用したスクリーニング法の開発に寄与する。

5. 藤田 裕子 (姫路赤十字病院 遺伝診療部)



「遺伝性腫瘍のプレバイバーおよびサバイバーに対する持続可能な支援体制の構築」

遺伝性腫瘍では複数の臓器においてがん罹患リスクが高くなり、長期の健康管理が複数の診療科に渡って必要となる。また血縁者に複数名、同じ遺伝性腫瘍を持つ場合があり家系での健康管理も重要となる。

そこで我々は遺伝性腫瘍のプレバイバー・サバイバーの健康管理支援アプリ開発を行っている。アプリの機能として ①持ち歩けるPHR (Personal Health Record)、②原因遺伝子ごとの情報提供、③受診のスケジューリングサポートを規定し、プログラムを作成した。当事者のインタビュー調査によるアプリの評価と修正を今後予定している。

近年、がんの療養とこれに続く人生において直面する様々な課題について、患者自身と患者を取り巻く周囲の方々が手を携えて乗り越えていこうとする“サバイバーシップ”の充実を大切にしたいという動きが広く普及してきました。平成26年度から始まった「がん研究10か年戦略」には、研究テーマの一つとして「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」が位置づけられ、令和5年度からの第4期がん対策推進基本計画においても、引き続き「がん患者等の社会的な問題への対策（がんサバイバーシップ支援）」を掲げられたことが大きな推進力となっています。

がん研究振興財団では、こうした動きをいち早く捉えて平成27年度から「がんサバイバーシップ研究支援事業」を開始して毎年多くの研究テーマの応募をいただけてきました。本稿で

は第8年次目にあたる令和4年度に採択された研究の成果をご紹介します。

これまでの研究成果として、患者団体やNPO活動の活性化が図られたほか、がんサバイバーの食生活を支える簡便なレシピ集の発刊に結びつく等、様々な成果物が得られております。

今年度の研究成果発表では、小児がん経験者のサバイバーシップ支援に向けた社会学的研究、AYA世代がんサバイバーに対するePROシステムを活用したスクリーニング法の開発、終末期医療を受けるがん患者に対する回想法を用いた音楽療法の開発など幅広い分野にまたがる多様な研究内容が報告されました。この中から、今後のがんサバイバーの皆さんに有用な知見、成果物が誕生することを切に願っております。

令和5年度

がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告 ～「がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して」～



公益財団法人 がん研究振興財団
専務理事
石塚正敏

1. はじめに

令和6年2月16日、令和5年度「がんサバイバーシップ研究セミナー」が、国立がん研究センター研究棟セミナールームにおいて開催されました。当日は、午前の部として「がんサバイバーシップ研究成果発表会」（令和4年度研究助成課題）を実施し、午後の部として当セミナーをweb併用によるハイブリッド方式で開催しました。Web参加者も含め226名の参加登録があり、常時140名余の視聴をいただきました。参加者の約7割は、医療関係者や製薬企業の方々に、サバイバー本人の参加は少なかった模様です。

昨年3月に閣議決定された「第4期がん対策推進基本計画」において、がん医療分野別目標「新規医薬品、医療機器及び医療技術の速やかな医療実装」の個別目標として「がん患者が十分な情報を得て治療を選択でき、治験へ参加できること等を可能とする」ことを目指すとされたことから、本年度のセミナーは「がんサバイ

バーの情報アクセス向上を目指して」をテーマとして、厚生労働省の後援を得たほか、医政局研究開発政策課長のご参加もいただき、盛会裡にセミナーを終えることができました。本稿では、その概要について報告します。

2. 【講演1】垣添忠生氏： がんサバイバーと情報アクセス

最初の演者は、当財団会長で国立がんセンター名誉総長の垣添先生で、「がんサバイバーと情報アクセス」をテーマに、基調的な講演がなされました。がんの宣告を受ける際の情報リテラシーの問題をケース別に解説いただきました。1) がんに関する知識のない人が早期がんと診断された場合、2) 知識のある人が早期がんと診断された場合、3) 知識のない人が進行がんと診断された場合、4) 知識のある人が進行がんと診断された場合、に分けて各々の問題点を分析したうえで、「がんは誰でもかかる普通の



病気」であるとの認識の周知がいかに大切であるかを強調されました。

3. 【講演2】丸山大氏：

血液がん治療に関する最新情報と“患者本位の「がん情報サイト」”への期待

2番目の演者は、がん研究会有明病院血液腫瘍科部長の丸山先生で、「血液がん治療に関する最新情報と“患者本位の『がん情報サイト』”への期待」をテーマに、白血病、リンパ腫、多発性骨髄腫に代表される血液がんに対する治療の中核をなす、全身化学療法の最新動向について解説をいただきました。CAR-T細胞療法や二重特異性抗体などの細胞免疫療法を始めとする新規薬剤や新規治療法の開発状況が紹介されました。



こうした新規薬剤・治療技術の開発に対応するため多種多様な治験が実施されていることから、科学的に的確でタイムリーな治験情報を提供している“患者本位の「がん情報サイト」”の役割は、今後一層増大していくとの見解も示されました。

4. 【講演3】柴田大朗氏：

各種がん情報サイトの現状と“患者本位の「がん情報サイト」”の特色

3番目の演者は、国立がん研究センター生物統計部長の柴田先生で、「各種がん情報サイトの現状と“患者本位の『がん情報サイト』”の特色」をテーマに、国立保健医療科学院や国立がん研



究センターを始めとする、我が国におけるがんに関連する各種データベースや情報検索サイトの開発経緯やそれぞれの特徴について、解説をいただきました。

特に、当財団が提供する“患者本位の「がん情報サイト」”については、科学院のデータベース（JRCT）を基本に、製薬企業の協力も得て治験薬の概要や作用機序の補足情報を付加した他、専門用語の補足解説や治験実施病院の情報が網羅的に得られるよう、患者・家族にも利用し易いシステムとなっているとの特色が紹介されました。

5. 【講演4】後藤悌氏：

患者視点での臨床試験・治験について

最終演者は、NPOキャンサーネットジャパン理事で国立がん研究センター呼吸器内科医長の後藤先生で、「患者視点での臨床試験・治験について」をテーマに、2021年に9つの患者団体を対象に実施されたアンケート調査結果を基に、がん患者の立場からの治験に対する認識や問題点について、ご発表いただきました。



調査結果からは、がん患者の治験に対する認知度は高く、7割の患者が治験・臨床研究への参加意欲を有しwebサイトを中心に治験情報の入手を試みているものの、必要とする情報に辿りつけていない現状（治験参加にまで至った例は5%ほど）が明らかにされました。また、QOL向上研究（低副作用薬開発）への参加意欲の高さが示され、がんの種類や病期に応じたタイムリーな治験情報の入手が可能となる情報検索サイトの構築が提言されました。

6. おわりに

各講演終了後の質疑応答では、治験実施に際して障壁となる我が国の制度上の問題点や臨床現場における課題、分散型治験に関する現状等に関して活発な質疑が行われました。

厚生労働省で治験・臨床研究等を所管してい

る医政局研究開発政策課の中田勝己課長からは、治験情報普及に資する検索情報サイトへの期待が示されたほか、今後のがん医療領域へも大きなインパクトが予想される「ゲノム医療推進法<通称>」(昨年6月成立)に基づく推進計画の検討状況について紹介されました。



令和5年度 事業実績

- 1. がん情報提供支援事業運営委員会報告 …… 20
委員長 上田 龍三
- 2. がん研究助成審議会報告 …………… 23
委員長 村上 善則
- 3. HOPE事業等運営委員会報告 …………… 30
委員長 上田 龍三
- 4. がんサバイバーシップ
研究支援事業運営委員会報告 …………… 33
委員長 亀井 美登里
- 5. 海外派遣研究助成委員会報告 …………… 36
委員長 関谷 剛男
- 6. 看護師・薬剤師・技師等
海外研修選考委員会報告 …………… 41
委員長 桑原 節子

がん情報提供支援事業運営委員会報告

委員長

上田 龍三（名古屋大学 特任教授）

令和3年10月1日に当財団HP上に開設された“患者本位の「がん情報サイト」”は、令和5年度までに全がん種（領域）の企業治験に関する基本情報の登録が完了しました。直近のデータでは毎月約3万件のアクセスを記録し、がん患者・家族等に幅広く活用されている状況がうかがえます。さらに、令和5年10月には検索機能の拡充を図る目的で、医療機関毎の企業治験情報の検索が可能となる「総合検索情報システム」機能を当サイトへ追加しました。これにより患者が身近な医療機関で治験に参加する機会が増大し、治験症例数の確保、承認申請の迅速化が図られることで新薬の市場投入の促進及び多くのがん患者にとっての治療選択肢の拡大も期待できることとなりました。

本稿では、令和5年度のがん情報提供支援事業の実績及び令和6年度事業計画について報告します。

I 委員会開催状況

1. がん情報提供支援事業運営委員会

（活動実績）

- (1) 第1回開催 令和5年 4月24日 審議
- (2) 第2回開催 令和5年 7月 4日 審議
- (3) 第3回開催 令和5年10月 6日 審議
- (4) 第4回開催 令和6年 1月26日 審議

2. がん情報検証部会

（活動実績）

第1回開催 令和5年4月7日 審議

3. 治験実施企業説明会開催 令和6年2月27日

- (1) 患者本位の「がん情報サイト」の公表について
 - ・令和6年度「がん情報サイト」実施計画案
 - ・基本情報システムの定期的な更新
 - ・総合検索情報システムの拡充
- (2) 患者団体によるがん情報サイトの評価について

II. 令和5年度事業実績

1. 患者本位の「がん情報サイト」追加公表

- 令和5年5月11日 胸部のがん（肺がん、乳がん等を含む）、消化管のがん（胃がん等を含む）、女性特有のがん、血液・リンパのがん
- 令和5年7月14日 脳・神経・眼のがん、頭頸部のがん（喉頭がん、甲状腺がん等を含む）、肝臓・胆のう・膵臓のがん、腎・尿管・膀胱のがん
- 令和5年10月23日 腹部のがん（腹膜がん、副腎がん等を含む）、男性特有のがん、皮膚のがん、骨・筋肉のがん

【以上で、全12領域の企業治験情報の登録公開を完了し、基本情報システムの構築が完成した】

2. 患者本位の「がん情報サイト」総合検索情報システムの開設

- 令和5年10月23日 医療機関別治験情報の検索が可能となるシステムを追加導入
令和6年1月22日 小児及びAYA世代のがん、希少がん、原発不明がん、支持療法や緩和ケアといった、企業治験情報量の少ない領域や検索が難しい分野の情報検索を容易にするシステムを導入するとともに、医師主導治験情報等についても収集を開始

3. 患者本位の「がん情報サイト」活動実績

- 令和5年度アクセス総数 約36万件
令和5年度情報改訂回数 約100回

○がんの各領域毎の情報システム登録治験数（2024年3月現在）

No	領域	治験数	No	領域	治験数
1	脳腫瘍、眼のがん	133	9	乳がん、子宮頸がん、子宮体がん（女性特有）	219
2	喉頭がん、甲状腺がん	493	10	悪性黒色腫、基底細胞がん	166
3	肺がん、乳がん	267	11	軟部肉腫、骨肉腫	125
4	胃がん、大腸がん、食道がん	213	12	白血病、悪性リンパ腫	494
5	肝細胞がん、膵臓がん	258	13	原発不明がん、支持療法・緩和ケア	7
6	膀胱がん、腎細胞がん	208	14	小児及びAYA世代	25
7	副腎がん、腹膜がん	159	15	希少がん	48
8	前立腺がん、精巣腫瘍（男性特有）	202		合計	3017

Ⅲ. 令和6年度事業計画

令和5年度において基本情報システムの整備が完了したことから、令和6年度事業に関しては、企業治験情報の更新はもとより、小児・AYA世代のがん等企業治験が限定される領域に対する情報（医師主導治験や特定臨床研究等）の充実を図るほか、患者団体等の要望も参考にしながら利便性を考慮したシステム改善を継続的に行っていきます。

令和5年3月に閣議決定された「第4期がん対策推進基本計画」においては、がん医療分野別目標「新規医薬品、医療機器及び医療技術の速やかな医療実装」の個別目標として「がん患者が十分な情報を得て治療を選択でき、治験へ参加できること等を可能とする」ことを目指すとされていることから、今後患者関係者からの治験参加への期待は一層の高まりを見せるものと考えられます。こうした期待に応えられる情報システムの拡充を今後とも図っていくこととします。

以上を踏まえ、令和6年度事業は次により計画しています。

1. 患者本位の「がん情報サイト」事業実施計画

①基本情報システムの更新

- ・全がん種の企業治験情報の定期的な更新（4半期単位を予定）

②総合検索情報システムの充実

- ・小児がん・AYA世代のがん、希少がん、支持療法及び緩和ケア領域など、企業治験数が限定され

る分野に関し、医師主導治験情報等を収集・公表

③患者団体によるがん情報サイトの評価を実施

- ・がん患者やその家族が治験情報を入手する際に、どのようなアプローチを行っているのか、その実態を明らかにするとともに、当財団が運営する“患者本位の「がん情報サイト」”がどの程度一般に認知・利用されているのかを把握し、当サイトの改善・充実を図っていくための基礎資料を得る

2. 予算額	計 3,000 万円
①人件費（4名分）	2,000 万円
②委員会経費	200 万円
③コンテンツ開発経費	700 万円
・システム管理費	(100 万円)
・検索システム更新・改修費	(200 万円)
・総合検索情報システム開発費	(400 万円)
④事務経費	100 万円

がん研究助成審議会報告

委員長

村上 善則（日本医科大学 先端医学研究所 分子生物学部門 特命教授）

1. がん研究助成事業について

がん研究助成審議会における審議概要について報告します。

がん研究助成金は、当財団の設立当初から、がん研究の進歩・発展に貢献することが期待される研究に対し実施している事業であり今年で56回目となりました。

このがん研究助成金は、当財団の事業にご理解をいただいた一般の方々からの御芳志を財源としており、貴重なご寄付に感謝申し上げます。

今年度のがん研究助成審議会は、令和6年1月16日に開催しました。

審議会委員の村上善則（委員長）、上田龍三、坂本亨宇、関谷剛男、山口俊晴、（敬称略）の5名及びがん研究振興財団堀田理事長が出席し、令和5年度（第56回）がん研究助成金交付者の最終選考が行われました。

研究助成金A課題は、わが国でがん研究に従事している日本人研究者の個人またはグループが対象で、一課題100万円以内で助成金交付数は20件としています。110件の申請があり、各委員による事前評価を踏まえて個別に評価した結果、20件が確定されました。（別掲採択者20名）

また、B課題は看護師、薬剤師、技師（放射線・検査等）、管理栄養士、放射線医学物理士、臨床心理士等を対象とし、一課題50万円以内で助成金交付数は5件としています。30件の申請があり、各委員による事前評価を踏まえ個別に評価した結果、5件が確定されました。（別掲採択者5名）

2. がん研究助成審議会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の5名により構成されています。（五十音順）

上田 龍三（名古屋大学 特任教授）

坂元 亨宇（慶應義塾大学 教授）

関谷 剛男（公益財団法人高松宮妃癌研究基金 理事長）

村上 善則（日本医科大学 先端医学研究所 分子生物学部門 特命教授）

山口 俊晴（公益財団法人がん研究会有明病院 名誉院長）

[A 課題]

	氏名	所属機関	研究課題名
1	有田 恭平	横浜国立大学	がんの治療薬開発を目指した DNA メチル化酵素 DNMT1 の阻害剤の探索とその評価
2	大塚 基之	岡山大学学術研究院	血中を循環する腸管細菌由来の膜小胞の解析による胆管癌発症機構の解明
3	木下 智成	東京慈恵会医科大学	原発性肺癌検出プローブのエアロゾル化とプロドラッグ化抗がん剤の末梢軌道内散布の確立
4	新藤 隆行	信州大学医学部	AM-RAMP2 系による心血管系の恒常性制御に基づく、癌転移抑制法の開発
5	雁金 大樹	東京医科歯科大学	白血病細胞間のクローン競合から生み出される細胞周期抑制集団を標的とした治療開発
6	小幡 裕希	国立がん研究センター研究所	ドライバー遺伝子変異キナーゼのオルガネラ局在異常の分子メカニズム～ホスホリパーゼ D2(PLD2) およびその産物の役割～
7	諸石 寿朗	熊本大学大学院	酸化ストレス耐性の伝播現象を断ち切る新たながん治療法の開発
8	西山 正章	金沢大学	天然変性タンパク質によるクロマチン制御と発がん機構の解明
9	上川 泰直	広島大学大学院	核膜を標的とした新規抗がん治療技術の開発
10	中山 淳	大阪国際がんセンター研究所	乳腺浸潤性小葉がんにおけるがん幹細胞集団多様性の解析
11	小沼 剛	横浜国立大学大学院	転写制御因子 BRD4 の立体構造に立脚した中分子すい癌治療薬の開発
12	岩佐 陽一郎	信州大学医学部	DNA メチル化解析による頭頸部癌の抗 PD-1 抗体耐性メカニズムの解明
13	大島 健司	兵庫医科大学医学部	グルタミントランスポーターと PI3K/Akt 阻害剤の併用による新規大腸がん治療法の開発
14	湯浅 光博	東京大学医学系研究科	臍帯血移植後の免疫再構築における制御性 T 細胞の機能の解明
15	佐々木 真理子	国立遺伝学研究所 新分野創造センター	がん化促進因子 ecDNA が複製される分子メカニズムの解明
16	岡田 守弘	県立広島大学	臓器連関因子の理解に基づく新規がん悪液質治療法の開発
17	山本 恵介	東京大学医学部附属病院	膵癌肝転移における代謝クロストークの解明と治療標的化
18	伊地知 秀明	東京大学医学部附属病院	膵癌モデルを用いた KRAS G12D 阻害剤の全身病態制御のインパクトと抵抗性獲得機序の解明
19	入江 奈緒子	(公財)実験動物中央研究所	始原生殖細胞がん化分子プロセスの同定と培養モデリング
20	昆 彩奈	京都大学大学院	骨髄系腫瘍におけるスプライシング因子 U2AF2 変異の遺伝学・生物学的特徴の解明

[B 課題]

	氏名	所属機関	研究課題名
1	渡邊 美也子	船堀ホームナースにじ	がん患者・家族の意思決定を支えるための多職種連携研修会の実施と評価～江戸川区内でがん看護を実践する専門看護師・認定看護師の所属を超えた取り組み～
2	足立 孝則	京都大学医学部附属病院	集合知医療を支援する次世代遠隔転移予測システムの開発
3	竹内 恵美	国立がん研究センター がん対策研究所	がん患者の遺族のうつおよび悲嘆に対する認知行動療法の予備的有効性検証：一群介入前後比較試験
4	須永 登美子	昭和大学歯科病院	データサイエンスを活用した心不全合併の担癌患者における抗がん薬と臨床転帰の関連の解明
5	宮坂 友侑也	山形大学大学院	重粒子線乳がん治療法の開発 - 新しいユニバーサル固定具・照射法の開発 -

A課題 (20名)

有田 恭平

●横浜市立大学



研究課題名

がんの治療薬開発を目指したDNAメチル化酵素DNMT1の阻害剤の探索とその評価

研究内容

哺乳類のDNAメチル化異常はがん抑制遺伝子の発現抑制や、トランスポソンの脱抑制によるゲノム全体の不安定化をもたらします。これが細胞のがん化と深く関わっており、DNAメチル化関連タンパク質は抗がん剤開発の標的分子として注目されています。申請者はDNAメチル化酵素DNMT1の活性化機構をクライオ電子顕微鏡単粒子解析で明らかにし、活性の制御部位を新たに発見しました。本申請では構造情報に基づいてDNMT1の阻害剤の探索とその評価を行い、DNAメチル化阻害を作用点とした抗がん剤の開発の構造基盤の解明を目指します。

大塚 基之

●岡山大学学術研究院



研究課題名

血中を循環する腸管細菌由来の膜小胞の解析による胆管癌発症機構の解明

研究内容

近年、様々な全身性疾患が腸内細菌と関連があると言われていますが、腸内細菌がどのように腸以外の疾患に関与するのか、その全貌は不明です。私たちは最近、腸内細菌の一種が体外に膜小胞と呼ばれる小胞を放出して大腸がん発症に関与していることを明らかにしました。本研究では、腸内細菌由来の膜小胞の中には腸管壁を透過して血中に流れ込んでいるものがあるのではとの仮説をたて、腸内細菌由来の小胞と、腸管から流れこむ門脈血の影響を直接受ける胆管癌との関連を、分子的に説明することをめざします。

木下 智成

●東京慈恵会医科大学



研究課題名

原発性肺癌検出プローブのエアロゾル化とプロドラッグ化抗がん剤の末梢軌道内散布の確立

研究内容

肺癌の好発部位は直径1mm以下の末梢気道であるため、内視鏡による観察、生検、治療が現状では困難です。我々は直径0.97mmのファイバースコープを開発し世界で初めてヒト肺の肺胞を観察しました。また東京大学と共同で肺癌細胞を蛍光検出するプローブとプロドラッグ化抗がん剤を開発しています。これらを統合し、肺癌の内視鏡的診断学の基盤づくり(観察)、ファイバースコープを組み込んだ生検鉗子と腫瘍検出プローブを用いた生検システムの樹立(生検)、プロドラッグ散布による低侵襲な肺癌の局所治療の確立(治療)を目指しています。

新藤 隆行

●信州大学医学部



研究課題名

AM-RAMP2系による心血管系の恒常性制御に基づく、癌転移抑制法の開発

研究内容

最近、「腫瘍循環器」という異分野融合領域が注目を集めている。癌の新規治療薬の登場に伴い、心血管系の新たな副作用などが明らかとなったためである。こうした背景の中、我々は、心血管系の傷害の存在が、逆に、癌を転移させる要因となる可能性を考えた。本研究では、生理活性ペプチド:アドレノメデュリンと、その受容体活性調節タンパク:RAMP2による心血管系の恒常性維持機構に着目する。原発巣と転移巣、それをつなぐ心血管系を一つの生体システムとして捉える新しい視点から、癌の転移抑制法を開発することを目的とする。

雁金 大樹

●東京医科歯科大学



研究課題名

白血病細胞間のクローン競合から生み出される細胞周期抑制集団を標的とした治療開発

研究内容

急性骨髄性白血病は予後不良な疾患で、長期生存は3割に至りません。近年、複数の分子標的療法が上市されつつありますが、未だに分裂細胞(細胞周期活性細胞)を標的とした化学療法が標準治療です。しかしこの化学療法後の再発は予後が悪く、全体として治療成績が不良になっているのが現状です。我々は、白血病細胞同士が相互に影響し合い、細胞周期抑制集団を形成している事を見出しました。本研究では、この細胞周期抑制集団を標的とした治療開発を目指します。

小幡 裕希

● 国立がん研究センター研究所



研究課題名

**ドライバー遺伝子変異キナーゼのオルガネラ局在異常の分子メカニズム
～ホスホリバーゼD2(PLD2)およびその産物の役割～**

研究内容

これまでに我々は、がんの変異シグナル分子が、これまで考えられてきた細胞内部位ではなく、ゴルジ領域やエンドソームといったオルガネラに異常局在し、そこからシグナル発信することを発見した。局在異常の原因メカニズムを理解すれば、その理解を応用した増殖シグナル阻害戦略の一つを開発できると考えている。最近、変異受容体チロシンキナーゼであるKITが、リン脂質関連の酵素に依存してゴルジ停留することを見出したので、本研究では、その詳細な分子メカニズムを解明し、その理解に基づく新規シグナル抑制戦略の構築を試みる。

諸石 寿朗

● 熊本大学大学院



研究課題名

酸化ストレス耐性の伝播現象を断ち切る新たながん治療法の開発

研究内容

近年、がん治療戦略の一つとして鉄依存性の脂質過酸化反応が引き起こす新たな形態の細胞死「フェロトーシス」が注目を集めています。本研究では、がん細胞間でのフェロトーシス耐性についての伝播現象に着目し、その制御法開発を試みることで新規のがん治療戦略を模索します。本研究を通して、がん細胞の不均一性が生み出す酸化ストレス耐性についての共生的コミュニケーションを理解し、新たなフェロトーシス誘導がん治療法開発を目指します。

西山 正章

● 金沢大学



研究課題名

天然変性タンパク質によるクロマチン制御と発がん機構の解明

研究内容

近年、核酸やタンパク質によって構成される膜のない構造体形成(液-液相分離)を介してクロマチン構造が維持・複製されていることが明らかになりつつある。クロマチンリモデリング因子CHDはがんと強い関連性があり、種々のがんでは変異が認められている。われわれはCHDが相分離凝集体を形成し、がんにおけるホットスポット変異を模倣した変異体は相分離凝集体を形成しなくなることを発見した。そこで本研究では、CHDによる液-液相分離とその破綻ががんを引き起こす分子メカニズムを明らかにすることを旨とする。

上川 泰直

● 広島大学大学院



研究課題名

核膜を標的とした新規抗がん治療技術の開発

研究内容

近年、ゲノムDNAを包む核膜が損傷と修復を繰り返すことが明らかとなっている。周辺へ浸潤するがん細胞ではその頻度が著しく高く、核膜修復とDNA修復を同時に阻害すると、浸潤を模倣した微小空間を移動中のがん細胞が合成致死に至る。これらのことから、浸潤・転移する際のがん細胞の生存に核膜修復機構が重要な役割を果たすことが強く示唆される。本研究では、浸潤能が高く予後不良の脳腫瘍・膠芽腫をモデルに、がん細胞における核膜の損傷修復機構を分子レベルで明らかにし、核膜を標的とした新規抗がん治療技術への応用を目指す。

中山 淳

● 大阪国際がんセンター研究所



研究課題名

乳腺浸潤性小葉がんにおけるがん幹細胞集団多様性の解明

研究内容

乳がんのほとんどは乳管に由来する乳管がんであるが、乳腺の末梢組織から発症する浸潤性小葉がんが一部見られる。生物学的には乳管がんと全く異なるにもかかわらず、現在の小葉がん治療は乳管がんに準じて行われ、小葉がんの生物学的特性や分子メカニズムに基づいた治療法は存在しない。本研究は、空間トランスクリプトーム解析を用いて小葉がんの腫瘍内細胞不均一性を明らかにし、小葉がんの増殖・生存に関わる分子経路を同定する。

小沼 剛

●横浜市立大学大学院



研究課題名

転写制御因子BRD4の立体構造に立脚した中分子すい癌治療薬の開発

研究内容

膵がんによる死亡者数は増加傾向にあり、新規治療法や予防法の開発は喫緊の福祉課題となっている。膵がん細胞では、がん原遺伝子であるMYCが過剰に発現しており、その発現量と膵がん患者の生存率には負の相関がある。しかしMYCはドメイン構造を有しない典型的な天然変性タンパク質であるため、MYCに直接結合してその活性を阻害する化合物の開発は困難である。そこで本研究では、MYCを標的遺伝子とした発現誘導機能を持つ転写制御因子BRD4を標的とし、その阻害剤を膵がんの新規治療薬候補として開発する。

岩佐 陽一郎

●信州大学医学部



研究課題名

DNAメチル化解析による頭頸部癌の抗PD-1抗体耐性メカニズムの解明

研究内容

抗PD-1抗体への治療耐性は頭頸部癌治療において今後克服すべき重要な課題である。我々はこれまでに、頭頸部癌組織において抗PD-1抗体に対する治療耐性の獲得前後でエピジェネティック修飾に関わるパスウェイの亢進とMHC class1の発現低下が起きていることを明らかにした。本研究では抗PD-1抗体治療を行った頭頸部癌患者の腫瘍組織に対して、エピジェネティクスの中でも特にDNAメチル化に焦点を当ててさらに詳細な解析を行うことにより、抗PD-1抗体への治療耐性獲得のメカニズムに迫ることを目的とする。

大島 健司

●兵庫医科大学医学部



研究課題名

グルタミントランスポーターとPI3K/Akt阻害剤の併用による新規大腸がん治療法の開発

研究内容

多くのがん細胞はグルタミンに依存して増殖している。そのため、グルタミン代謝を標的とした創薬が試みられているが、がん細胞の代謝の可塑性などにより耐性が生じる。我々は、グルタミントランスポーター阻害剤への耐性を獲得した大腸がん細胞株でAkt/mTORシグナル伝達経路が活性化しており、Akt阻害剤の併用により相乗的な細胞増殖抑制効果を示すことを見出している。今後詳細なメカニズムを明らかにし、アミノ酸代謝とシグナル伝達経路の阻害剤の併用というがん治療法を創出する。

湯浅 光博

●東京大学医学系研究科



研究課題名

臍帯血移植後の免疫再構築における制御性T細胞の機能の解明

研究内容

臍帯血移植術は、難治性造血器腫瘍への根治術の一つとして確立しています。本邦は、世界的にも多くの臍帯血移植実施件数を誇り、生着前症候群を駆動した質的にも独自の治療法が実施しています。臍帯血移植は、移植後早期よりNK細胞、制御性T細胞の回復が見られるのが特徴ですが、多彩な細胞がどのように免疫再構築に関わるのか分かっていません。免疫再構築の解明は、移植後の致命的合併症の低減につながる事が期待されます。本研究では、制御性T細胞に注目し、臍帯血移植後の免疫再構築の機序を明らかにすることを目的とします。

佐々木 真理子

●国立遺伝学研究所 新分野創造センター



研究課題名

がん化促進因子ecDNAが複製される分子メカニズムの解明

研究内容

正常な細胞は直鎖状の染色体DNA上に遺伝情報を保存しているが、約40%のがん細胞は、がん遺伝子などを含んだ巨大な染色体外環状DNA (extrachromosomal [ec] DNA) を多数保有している。ecDNAの蓄積は、そこに含まれるがん遺伝子の発現量の増加を引き起こし、がんの発症や進行、腫瘍内不均一性、薬剤耐性の獲得に寄与すると考えられている。本研究では、ecDNAがどのようにDNA複製され、細胞内に維持されるのかについての分子メカニズムを解明することを目指す。

岡田 守弘

● 県立広島大学



研究課題名

臓器連関因子の理解に基づく新規がん悪液質治療法の開発

研究内容

がん悪液質は多くの進行がん患者に認められるが、がんが全身症状を引き起こし、生体の健康に悪影響を及ぼすメカニズムの多くは未だに不明である。私たちは最近、個体レベルのスクリーニングを遂行し、がん細胞が分泌する新規の臓器連関因子を発見した。そして、分泌された因子はがん細胞から離れた臓器に作用して代謝異常を引き起こし、個体を不調にすることを見出した。本研究では、がん-宿主連関解析を駆使して、がん悪液質を司る分泌因子の分子機構と普遍性を明らかにすることを目指す。

山本 恵介

● 東京大学医学部附属病院



研究課題名

膵癌肝転移における代謝クロストークの解明と治療標的化

研究内容

膵癌は膠原線維に富む乏血性腫瘍を形成するため、その内部は高度な低栄養状態に陥っている。申請者は、膵癌原発巣において、膵癌細胞が様々な間質細胞から供給される代謝産物に依存して生存していること、こうした癌細胞と間質細胞の代謝クロストークを阻害することで、膵癌の進展を抑制できる可能性を報告してきた。本研究では、進行膵癌患者の大多数が罹患する肝転移巣において、転移膵癌細胞が、どのような間質細胞とどのような代謝産物のやりとりを行っているのかを明らかにし、その機序を解明することで、新規治療法の開発を目指す。

伊地知 秀明

● 東京大学医学部附属病院



研究課題名

膵発癌モデルを用いたKRAS G12D 阻害剤の全身病態制御のインパクトと抵抗性獲得機序の解明

研究内容

KRAS G12D 阻害剤は、今後、最難治癌である膵癌の予後を大きく改善させることが期待されているが、抵抗性の獲得が問題視されている。そこで、臨床の膵癌像をよく再現し膵癌関連血栓症も伴う膵発癌モデルを用いて、KRAS G12D 阻害剤の膵癌制御のインパクトを膵癌組織の変化、膵癌関連血栓症の制御効果、生命予後改善効果から明らかにし、KRAS G12D 阻害剤の奏功性および抵抗性獲得の機序を膵癌組織の網羅的解析から明らかにする。またその奏功性および抵抗性獲得を予測できる血中バイオマーカーを明らかにする。

入江 奈緒子

● (公財) 実験動物中央研究所



研究課題名

始原生殖細胞がん化分子プロセスの同定と培養モデリング

研究内容

奇形腫や小児脳腫瘍ジャーミノーマ、精巣がんなどの生殖細胞がんはヒト発生約3週間頃発生する卵や精子の前駆細胞、始原生殖細胞が形質転換すること起因するが、その分子メカニズムは不明である。本研究では、これまでの研究で樹立したヒト多能性幹細胞(ES/iPS細胞)からの効率的な始原生殖細胞誘導モデルを用い、胎児期始原生殖細胞の正常な分化が阻害され、生殖細胞がん(Carcinoma in situ)へ形質転換する内因性トリガーを同定することにより、in vitro生殖細胞がん化モデルの構築を目指す。

昆 彩奈

● 京都大学大学院



研究課題名

骨髄系腫瘍におけるスプライシング因子U2AF2 変異の遺伝学・生物学的特徴の解明

研究内容

骨髄異形成症候群は、血球形態の異常と急性骨髄性白血病への移行を特徴とする難治性の骨髄性腫瘍である。骨髄異形成症候群のゲノム解析を通じて、スプライシング因子に高頻度に遺伝子変異が見られることが報告されている。最近我々は、多数症例の骨髄系腫瘍の全エキソン解析により、これまで報告のなかった、スプライシング因子U2AF2遺伝子にホットスポット変異が頻発することを見出した。本研究では、U2AF2変異の遺伝学的・生物学的特徴を解明し、スプライシング因子が変異した骨髄系腫瘍の病態を深く理解することを目指す。

B課題 (5名)

渡邊 美也子 ●船堀ホームナースにじ



研究課題名

**がん患者・家族の意思決定を支えるための多職種連携研修会の実施と評価
～江戸川区内でがん看護を実践する専門看護師・認定看護師の所属を超えた取り組み～**

研究内容

江戸川区における在宅療養支援診療所は8%（人口10万人あたり）である一方、がん診療拠点病院などの専門施設が少なく、がんの自区地域完結率(2025年)が低くなると推計される。江戸川区の医療、介護、福祉職は、他区で治療を受けながら、療養先や最期を迎える場を決めることになる患者・家族の意向を聴き、意思決定できるよう支援することが求められる。そこで、がん患者・家族の意思決定を支えるための多職種連携研修会を実施し、評価することを目指す

足立 孝則 ●京都大学医学部附属病院



研究課題名

集合知医療を支援する次世代遠隔転移予測システムの開発

研究内容

遠隔転移の克服は放射線治療における重要課題の一つであり、その発症リスクを予測した上で、適切な治療戦略を練る必要がある。この課題に対し、肉眼では捉えきれない画像特徴量を活用した予後予測の実現可能性が報告されているが、臨床現場での実用化に至っていない。応募者は、ユーザーに複雑な処理を強いることなく、画像特徴量を軸とした集合知医療を実現できれば、患者ごとに適切な治療戦略を講じることができるのではないか、という着想に至った。本研究課題は、画像特徴量を軸とした次世代遠隔転移予測システムの開発を目指す。

竹内 恵美 ●国立がん研究センターがん対策研究所



研究課題名

がん患者の遺族のうつおよび悲嘆に対する認知行動療法の予備的有効性検証：一群介入前後比較試験

研究内容

遺族に対するケアは、代表的な緩和ケアモデルの一部分として示される。大切な人を失った遺族の悲嘆は、これまで正常な心理反応として捉えられてきたが、近年、国際疾病分類や精神疾患の診断・統計マニュアルにおいて遷延性悲嘆症が新疾患として登録されたことから標準治療の開発が積極的に進むと予測される。本研究では、治療効果が実証された心理療法やモデルを活用し、かつ日本独自の社会文化的要素を取り入れた介入プログラムの開発を行ない、その有効性を予備的検証するための一群介入前後比較試験を実施することを目的とする。

須永 登美子 ●昭和大学歯科病院



研究課題名

データサイエンスを活用した心不全合併の担癌患者における抗がん薬と臨床転帰の関連の解明

研究内容

抗がん薬によるがん治療関連心血管病は、がん治療における重大な合併症の1つである。しかしながら、免疫チェックポイント阻害薬等新たな抗がん薬が開発される一方、これら抗がん薬によって引き起こされるがん治療関連心不全についての詳細な分析は行われていない。そのため、各々の抗がん薬における臨床転帰に関するデータを詳細に分析し、抗がん薬の特性を検証することは重要である。本研究は、データサイエンスを活用し、心不全を合併した担癌患者における抗がん薬の種類と臨床転帰を明らかにすることを目的とする。

宮坂 友侑也 ●山形大学大学院



研究課題名

重粒子線乳がん治療法の開発—新しいユニバーサル固定具・照射法の開発—

研究内容

10年ほど前から放射線治療の1つに分類される重粒子線治療を用いた切らない乳がん治療の臨床試験が行われ、その安全性および有効性が報告されている。しかしながら、治療を実施できる施設が限られていることから、その治療手法が確立されていないという課題がある。特に、重粒子線ビームを腫瘍に精度よく照射するには乳房を固定する必要があるが、乳房は柔らかく容易に移動、変形する臓器であるため固定が困難である。本研究では重粒子線治療の際に乳房を固定し、精度よく照射を行う新たな手法及び器具を開発することを目指す。

HOPE事業等運営委員会報告

委員長

上田 龍三 (名古屋大学 特任教授)

1. がんになっても生きる希望を持てる事業 (HOPE事業) について

がん研究を担う人材育成については、これまで、がんの本態解明を目指した政府の「対がん10か年戦略(1次～3次)」の推進に当たり、当財団の「若手研究者育成事業(リサーチ・レジデント制度)」が30年に亘り大きな役割を果たしてきました。

この事業は、平成27年度からAMEDに移管され、科学研究費の一部として助成してきましたが、同年からがん研究振興財団の新たな事業として若手の上級研究者を育成することを目的としたシニア・リサーチフェロー研究助成を令和3年度までの7年間に亘り実施し、39名の方に助成してきました。

然しながら、MDの応募者が減少傾向にある一方、がんの本態解明の基礎研究から得られた成果を活用し、臨床応用を目指した研究の加速化が求められていることから、基礎研究の成果を臨床に繋ぐ「トランスレーショナル・リサーチ(TR)」の育成事業に重点を移し、臨床指導を行う雇用機関の処遇に着目した「TR研究奨励助成金」を令和4年度から新たに実施しました。

令和4年度から始まった若手を対象とした「TR研究奨励助成金」の交付者の皆さんが、将来どのような領域で、どのような研究者・医療従事者などとして成長されていくのか楽しみに見守りたいと思います。「がん」の撲滅は、多くの方々の悲願であり、その取り組みは官民挙げて診療、医薬品、医療機器の開発など大きな成果を上げております。

微力ではありますが、HOPE事業の発展に貢献できれば幸いです。

2. HOPE事業等運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の5名により構成されています。(五十音順)

上田 龍三 (名古屋大学 特任教授)

坂元 亨宇 (慶應義塾大学 名誉教授)

菅野 純夫 (一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事)

村上 善則 (東京大学医科学研究所 教授)

吉倉 廣 (国立感染症研究所 名誉所員)

3. HOPE事業等について

・トランスレーショナル・リサーチ（TR）若手研究者育成事業研究奨励助成金

がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床に繋ぐトランスレーショナル・リサーチの若手研究者を育成することを目的に、研究奨励助成金を4件交付しました。その後、1件が辞退となりました。

○令和5年度の助成（実績）

1件 150万円助成 3件 助成額 450万円

	氏名	所属機関	研究課題
1	森下 真由	国立がん研究センター研究所	正常血液細胞における体細胞性変異とクローン進化の解析
2	鎌田 諒	国立がん研究センター 先端医療開発センター	染色体不安定性を介した免疫応答機構解明と免疫チェックポイント阻害剤併用療法の確立
3	陳 好	国立がん研究センター研究所	非機能性膵神経内分泌腫瘍の肝転移メカニズム解明と新規治療標的同定

森下 真由

● 国立がん研究センター研究所



研究課題名

正常血液細胞における体細胞性変異とクローン進化の解析

研究内容

喫煙歴や飲酒歴など異なった背景を持った健常人由来の正常血液細胞における遺伝子異常の解析を目的に末梢血検体由来の単一造血前駆細胞コロニーを作成して全ゲノムシーケンスを行った。全ゲノム解析により、造血前駆細胞に獲得される遺伝子異常の蓄積量の単一細胞レベルでの比較検討や、塩基置換のパターンから変異が獲得される原因を解析する。本研究により、造血器腫瘍発症の背景にある遺伝子異常獲得の機序や早期のクローン進化の過程が明らかになると期待される。

鎌田 諒

● 国立がん研究センター先端医療開発センター



研究課題名

染色体不安定性を介した免疫応答機構解明と免疫チェックポイント阻害剤併用療法の確立

研究内容

がん細胞の特性である「染色体不安定性」は不均一な腫瘍微小環境を作り出し、治療抵抗性獲得の一員となっています。私は染色体不安定性が惹起する免疫応答機構に着目し、(1)染色体不安定性が引き起こす細胞内ストレス反応機構、(2)染色体不安定性がどのようにがん細胞内の免疫応答を惹起するのか、(3)細胞内の免疫応答がどのように、がん微小環境に働きかけるのかについて、腫瘍組織～1細胞レベルで不均一な腫瘍微小環境を解析することで、分子メカニズム解明と新規ターゲットを発見し、新たな治療法の確立を目指しています。

陳 好

● 国立がん研究センター研究所



研究課題名

非機能性膵神経内分泌腫瘍の肝転移メカニズム解明と新規治療標的の同定

研究内容

非機能性膵神経内分泌腫瘍(NF-PanNET)の最大の予後不良因子は肝転移であるが、肝転移症例に有効な治療薬は存在せず、治療薬の開発は急務である。本研究では、NF-PanNET肝転移におけるがん微小環境の役割に着目し、肝転移の本態を解明することで新規治療標的を同定し、治療薬開発につながる成果を得ることを目的とした。また、本研究は、悪性化の指標となるマーカー遺伝子の同定にもつながるため、将来的にNF-PanNETを遺伝子情報に基づいて層別化し、治療選択肢を提供することが可能となると考えている。

がんサバイバーシップ研究支援事業 運営委員会報告

委員長

亀井 美登里 (埼玉医科大学 教授)

1. がんサバイバーシップ研究支援事業の趣旨・目的

がんの診断や治療を受けた“その後”を生きていくプロセス全体として、がんが長く付き合う慢性病に変化しつつある今日、「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ための研究支援が喫緊の課題となっています。このため、(公財)がん研究振興財団は2015年度からの新規事業として、我が国のがんサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に大きく貢献できる研究課題に対する支援事業を実施しております。

この研究支援事業については、患者本人や家族が本来の生活の場所である家庭、職場、学校、地域コミュニティなどで暮らしていく過程で直面する、差別・偏見等の様々な課題解決に関する研究を確立するという大きな目標を有することから、民間企業からの賛助金により実施することとしています。

2. がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の名6名により構成されています。(委員名簿：五十音順)

亀井 美登里 (埼玉医科大学 教授)

児玉 哲郎 (栃木県立がんセンター 名誉所長)

高橋 都 (NPO 法人日本がんサバイバーシップネットワーク 代表理事)

竹内 朋子 (東京医療保健大学大学院 教授)

田中 徳雄 (元日本製薬工業協会 常務理事)

中川原 章 (公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団 名誉理事長)

3. 令和5年度研究助成について

(1) 研究助成課題の公募

がんサバイバーの生きる力を引き出すような支援を目的とした研究課題について、令和5年9月1日～10月31日の間、個人、グループ・団体(患者団体等を含む)、企業等を対象に一般課題及び指定課題の公募を行い、14課題の応募を得ました。

(2) 令和5年度の研究助成実績

運営委員会において審議した結果、一般課題4件、指定課題1件の計5課題を採択しましたが、その後一般課題1件が辞退となりました。

(4課題 助成総額1,850,000円)

	氏名	所属機関	研究課題
1	新垣 理宣	東北大学病院 周術期口腔健康管理部	(一般) がんサバイバーを薬剤関連顎骨壊死から守る医科歯科連携 および地域連携の支援ツールの開発
2	村瀬 舞	東京医科歯科大学 生体補綴歯科学分野	(一般) 頭頸部がん患者へのデジタルデンティストリーを応用した 支持療法の確立
3	丸 光恵	兵庫県立大学看護学部 小児看護学	(一般) AYA世代がん患者・サバイバーが体験する Microaggression の実態調査
4	長谷川一男	肺がん患者の会ワンステップ	(指定) 患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態と課題に関 する実態調査

4. がんサバイバーシップ研究支援事業の研究成果について

(1) がんサバイバーシップ研究成果発表会・研究報告会

(令和6年2月16日 国立がん研究センターセミナールームとオンラインのハイブリッド開催)

第1部として令和4年度に研究支援を実施した一般課題5件についての研究成果発表会を、そして第2部として、「がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して」をテーマに4名の先生方からご講演をいただくセミナーを開催いたしました。(次ページプログラム参照)

なお、全体で220名の参加申し込みを頂き、当日のオンライン参加は139名余でありました。

(2) がんサバイバーシップ研究支援事業の成果について

平成27(2015)年度にスタートした本事業によって、がんサバイバーの方々が抱える様々な課題の解決を目指す研究テーマを支援・推進して参りました。こうした研究成果として、患者団体やNPO活動の活性化が図られた他、教育問題、就労問題、社会復帰対策等、サバイバーの方々を取り巻く様々な社会問題についても幅広くテーマ設定を行い、解決すべき課題や解決に向けたプロセスの明確化が図られました。更には、合併症や後遺症に悩むサバイバーのための各種ツールやプログラムの開発も着実な進展を見せておりますし、最近では、がんゲノム解析を応用した未発症ハイリスク者(プレバイバー)対策や生殖器がんサバイバーの性生活問題への対応等、研究テーマ領域の一層の拡大がみられています。

これらの研究成果の中から、今後がんサバイバーの皆さんのQOL(生活の質)向上に直結する有用な知見・技術や成果物が世に出ることを大いに期待しております。

新垣 理宣

● 東北大学病院



研究課題名

がんサバイバーを薬剤関連顎骨壊死から守る医科歯科連携および地域連携の支援ツールの開発

研究内容

がん骨転移患者に使用される骨吸収抑制薬により、歯を支えるあごの骨の壊死(薬剤関連顎骨壊死)が生じることがあり、がんサバイバーの生活を阻害する。本研究では、昨年実施した多施設におけるアンケートをもとに、がん主治医、病院歯科の歯科医師・歯科衛生士、かかりつけ歯科の歯科医師・歯科衛生士、薬剤師、看護師など多職種が双方向的に情報共有できるがん骨転移における新たな医科歯科・地域連携のための支援ツールを開発、社会実装を目指す。

村瀬 舞

● 東京医科歯科大学



研究課題名

頭頸部がん患者へのデジタルデンティストリーを応用した支持療法の確立

研究内容

頭頸部がんの治療は実質欠損のみならず口腔粘膜炎、放射線性骨髄炎、開口障害等により発音機能、摂食嚥下機能、審美性を低下させる。治療後の社会復帰の為のサポートとして歯科補綴装置による機能回復は重要な役割を担う。一方、歯科による支持療法は医科との緊密な連携が肝要だが、日本の多くの施設では困難な状況である。このような状況を打破するため、本研究はデジタルデンティストリー技術により簡便、短時間、高精度で且つ患部に非接触の口腔内スキャナを用いて患者負担を軽減し装置を製作するシステムを構築することを目指す。

丸 光恵

● 兵庫県立大学



研究課題名

AYA世代がん患者・サバイバーが体験するMicroaggressionの実態調査

研究内容

マイクロアグレッションとは、無意識の偏見に基づき、自覚のないまま対象者を傷つける、言語的・非言語的・環境的メッセージを指します。思春期・若年成人期(Adolescents and Young Adults, 以下AYA世代)に発症するがんは、全がんの僅か2.6%。その希少性により彼らはマイクロアグレッションに晒されている可能性があります。本研究ではAYA世代にとって最適ながん医療・支援の実現に向けた示唆を得る為、彼らが体験するマイクロアグレッションの実態を明らかにしたいと考えています。

長谷川 一男

● 肺がん患者の会ワンステップ



研究課題名

患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態と課題に関する実態調査

研究内容

本研究においては、患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態を明らかにし、患者の治験情報へのアクセスと求める情報取得に至る過程での課題を明らかにする。そのうえで、数名の患者を選定して実際に治験サイトを使用してもらい、インタビューを通じて、情報発信手法やサイトの改善ポイントを提言する。

海外派遣研究助成委員会報告

委員長

関谷 剛男（公益財団法人高松宮妃癌研究基金 理事長）

1. 海外派遣研究助成事業について

（公財）がん研究振興財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を推奨するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的に、種々の事業を行っています。

本委員会が担当しているのは、研究助成事業の中で行われる「海外派遣研究者への助成事業」です。

がんを専門分野とする医師をはじめとする研究者による、短期間、海外で研究成果の発表、研究に関する協議、研究施設調査、研究資料の収集等の先進的な研究活動に必要な海外派遣研究助成を行うものです。

応募の資格は、がんに関する基礎研究や臨床研究に従事する医師をはじめとする若手研究者で将来指導者として期待され、所属長からの推薦者となっています。2023年度の助成金額等は、事業計画の範囲で200万円を限度に1件20万円以内で交付数は10名程度としています。最終的に25件の応募がありました。

2. 海外派遣研究助成委員会について

2023年度の委員会は、3名の委員、菅野純夫委員（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート代表理事）、関谷剛男委員（公益財団法人高松宮妃癌研究基金理事長）、中川原章委員（公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長）で構成されており、25件の申請案件を審査しました。

委員会としての助成決定に当たっては、

- (1) 参加希望学会の重要性を考慮する。
- (2) 同じ学会に参加する申請の場合、口演か、示説かを考慮する。
- (3) 一部の施設への助成に偏らないよう公平性を考慮する。
- (4) 過去に助成を受けた頻度を勘案し、特定個人に偏らないよう公平性を考慮する。
- (5) 本年度は10件の助成を行う。
- (6) 所属長の推薦理由を考慮する。
- (7) 若手医師等研究者への助成の観点から40歳を目途に年齢を考慮する。

以上を踏まえ、書面審査を含めて計9回の委員会において、慎重なる審議の結果、8名への助成を決定しました。

3. 2023年度の海外派遣研究助成

- 1) Digestive Disease Week 2023（米国消化器病週間 シカゴ・アメリカ）1名（口演）
- 2) The 31st European Conference on General Thoracic Surgery（第31回欧州胸部外科学会 イタリア・ミラノ）1名（示説）
- 3) ESMO World Congress on Gastrointestinal Cancer 2023 Care（世界消化器癌学会 バルセロナ・スペイン）1名（示説）
- 4) 24th IPOS World Congress of Psycho-Oncology（第24回国際サイコオンコロジー学会 イタリア・ミラノ）1名（口演）
- 5) European Respiratory Society(ERS) International Congress 2023（欧州呼吸器学会 2023 イタリア・ミラノ）1名（示説）
- 6) ISDE2023（19th ISDE World Congress for Esophageal Diseases：第19回国際食道学会学術集会 トロント・カナダ）1名（口演）
- 7) UEGW2023（第31回欧州消化器病学会週間 コペンハーゲン・デンマーク）1名（口演）
- 8) European Society of Gynaecological Oncology 2024 Congress（欧州婦人科腫瘍学会 バルセロナ・スペイン）1名（示説）

4. 海外派遣研究助成の成果

海外の学術集会に参加し研究成果を発表することは、医師をはじめとする若手研究者等が、そのがん研究の方向性を確認する貴重な機会です。また、世界の動向を直接感知する貴重な機会です。この活動を助成することの意義は、海外学会参加で得たものをがん研究者間で、また本事業に寄付を頂いた方々と研究者との間で分かち合うことにあると考えます。助成対象者は、帰国後1ヶ月以内に研究成果報告書、その他参考となる資料を当財団に提出することになっています。この報告は財団ホームページで閲覧することが出来ます。

2023年度 海外派遣研究助成金受賞者

	氏名	所属	派遣先	開催地
1	鈴木 祐輔	九州大学大学院 医学系学府	Digestive Disease Week 2023 (米国消化器病週間)	シカゴ (アメリカ)
2	甲 貴文	日本赤十字社 和歌山医療センター	The 31st European Conference on General Thoracic Surgery (第 31 回欧州胸部外科学会)	イタリア (ミラノ)
3	八木 秀祐	国立国際医療研究センター病院	ESMO World Congress on Gastrointestinal Cancer 2023 (世界消化器癌学会)	バルセロナ (スペイン)
4	小杉 和博	国立がん研究センター 東病院	24th IPOS World Congress of Psycho-Oncology (第 24 回国際サイコオンコロジー学会)	イタリア (ミラノ)
5	矢野 海斗	慶應義塾大学病院	European Respiratory Society(ERS) International Congress 2023 (欧州呼吸器学会 2023)	イタリア (ミラノ)
6	並河 健	がん研有明病院	ISDE2023 (19th ISDE World Congress for Esophageal Diseases : 第 19 回国際食道学会学術集会)	トロント (カナダ)
7	末吉 巧弥	帝京大学 冲永総合研究所	第 31 回欧州消化器病学会週間 (UEGW2023)	コペンハーゲン (デンマーク)
8	北台 留衣	国立がん研究センター 中央病院	European Society of Gynaecological Oncology 2024 Congress (欧州婦人科腫瘍学会)	スペイン (バルセロナ)

鈴木 祐輔

●九州大学大学院 医学系学府



派遣先／渡航期間

Digestive Disease Week 2023

(米国消化器病週間) (シカゴ、アメリカ) / 2023.5.4 ~ 5.11

研究内容

私は、2023年5月6日～5月9日にシカゴで開催された Digestive Disease Week 2023に参加し、Topic Forum (ASGE EUS-Guided Interventions: Outcomes and Innovations)で口頭発表を行いました。20mm未満の胃粘膜下腫瘍に対する診断精度を改善するために、糸付きクリップを用いたトラクション補助下EUS-FNBを開発しその成果を報告した。ランダム化非盲検前向き比較試験により、診断精度(86.7% vs. 63.3%, $p=0.037$)、適正検体採取率(90% vs. 66.7%, $p=0.028$)とトラクション補助下EUS-FNBが従来のEUS-FNBより優位に優れていることが示されました。粘膜下病変に関する術前診断の議論があり、EUS-FNBにトラクションを用いる発想に大きな反響をいただきました。

甲 貴文

●日本赤十字社和歌山医療センター



派遣先／渡航期間

The 31st European Conference on General Thoracic Surgery

(第31回欧州胸部外科学会) (ミラノ、イタリア) / 2023.6.2 ~ 6.8

研究内容

EGFR遺伝子は肺癌の重要なドライバー遺伝子であるが、その変異の有無と従来の術後補助化学療法の有効性の関係は不明であった。EGFR遺伝子変異に注目し、cisplatinベースの術後補助化学療法の効果を解析した。手術を施行した非小細胞非扁平上皮癌の症例で、cisplatinベースの術後補助化学療法を行ったものを対象とし、EGFR遺伝子変異陽性例と陰性例を比較した。5年無再発生存率はEGFR遺伝子変異陽性群で有意に不良であり(27.6% vs. 51.2%, $p = 0.026$)、EGFR遺伝子変異陰性症例と比較して従来の術後補助化学療法単独では術後再発予防効果が不十分な可能性が示唆された。

八木 秀祐

●国立国際医療研究センター病院



派遣先／渡航期間

ESMO World Congress on Gastrointestinal Cancer 2023

(世界消化器癌学会) (バルセロナ、スペイン) / 2023.6.27 ~ 7.3

研究内容

Stage II / IIIの胃癌の根治胃切除後の術後補助化学療法中もしくは補助化学療法終了後半年以内の早期再発は予後不良と報告されているが、早期再発のリスク因子に関してはいまだ不明である。多施設共同後方視的コホートにて早期再発のリスク因子解析を行った。術後血清CEA $\geq 5\text{ng/mL}$ と好中球-リンパ球比(NLR) > 1.8 は独立した早期再発のリスク因子でありStage II / IIIの胃癌の根治的胃切除術後の早期再発を予測するための有用なバイオマーカーである可能性が示唆された。各諸国の方とディスカッションを行い、今後の課題を得ることができ、研究発展の参考とすることができた。

小杉 和博

●国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院



派遣先／渡航期間

24th IPOS World Congress of Psycho-Oncology

(第24回国際サイコオンコロジー学会) (ミラノ、イタリア) / 2023.8.30 ~ 9.5

研究内容

COVID-19パンデミック中の18歳未満の子どもを持つがん患者の孤独感を、パンデミック前と比較調査した観察研究を行った。多変量解析にて背景因子を調整し、パンデミック前とパンデミック中の孤独感の有病率に有意な差は認められなかったことを口頭発表にて報告した。幼い子どもを持つがん患者は世界的に増加しており、そのサポートは喫緊の課題である。会場では幼い子どもを持つがん患者へのサポートプログラム開発者と直接ディスカッションする機会を持って、我々の研究の方向性も相談でき、大変有意義な機会となった。

矢野 海斗

●慶應義塾大学病院



派遣先／渡航期間

European Respiratory Society(ERS) International Congress 2023
(欧州呼吸器学会2023) (ミラノ、イタリア) / 2023.9.9～9.14

研究内容

ミラノで開催されたERSのポスターセッションにて、気管支鏡下生検を使用したNGS解析の成功率を切除可能症例と切除不能症例を比較した研究結果を発表しました。肺癌の遺伝子解析や新薬開発が進み、今後益々周術期治療が盛んになっていくことが想定されます。その中で、切除可能症例においても術前にドライバー遺伝子を明らかにする必要性が増していくと考え、本研究に着手しました。大変規模の大きな学会で、大変活発な議論が交わされていました。今回の経験を糧に今後も研究結果を発表していきたいと思います。

並河 健

●がん研有明病院



派遣先／渡航期間

ISDE2023 (19th ISDE World Congress for Esophageal Diseases : 第19回国際食道学会学術集会) (トロント、カナダ) / 2023.9.7～9.13

研究内容

バレット食道腺癌の深達度診断に関する口演発表を行った。粘膜下層浸潤を示唆する所見として「腫瘍径>20mm、複合型の肉眼型、組織生検での低分化成分検出」の3因子を得た。その中で特に、組織生検で低分化成分が検出された場合に最も強い関連性があり、更に拡大内視鏡を用いる事でそれを予測できる可能性が示唆された。質疑応答では多くの質問があり議論を交わした。本研究への注目度の高さ・意義深さについて感じると共に、更なる研究発展の参考となる知見を得る事が出来、大変貴重な機会であった。

末吉 巧弥

●帝京大学冲永総合研究所



派遣先／渡航期間

第31回欧州消化器病学会週間(UEGW2023)
(コペンハーゲン、デンマーク) / 2023.10.14～10.17

研究内容

消化器肝胆膵疾患にて、患者個別の解剖と内視鏡手術手技の空間認識を改善するため、VR/AR/MR技術とメタバースを活用した手術支援教育システムを開発した。外科医が手術モニター横にCT/MRIから作成した3D医用画像をホログラムにて空間的に提示し、有害事象の発生なしに医師の空間認識が向上した。さらに、メタバースを通じて、3D医用画像や手術技術を共有・追体験し、若手医師の修練に寄与した。現地では、消化器内科医師や展示企業と臨床におけるXR活用やXRデバイスの選択に関する議論ができ、非常に有意義な結果を得ることができた。

北台 留衣

●国立がん研究センター中央病院



派遣先／渡航期間

European Society of Gynaecological Oncology 2024 Congress (欧州婦人科腫瘍学会)
(バルセロナ、スペイン) / 2024.3.6～3.10

研究内容

第25回欧州婦人科腫瘍学会において、希少癌である子宮・卵巣がん肉腫におけるメソテリンの発現の検討に関してポスター発表を行った。我々はメソテリン高発現が子宮がん肉腫の良好な予後因子である可能性を明らかにし、他のがん腫では有効性が示されているメソテリンを標的とした治療が、子宮がん肉腫でも有効である可能性を報告した。子宮・卵巣がん肉腫は極めて予後不良の疾患であるが未だ標準治療が確立されておらず、学会参加者とのディスカッションを通して、薬剤開発の必要性を再認識し、今後の研究課題を得ることができた。

看護師・薬剤師・技師等 海外研修選考委員会報告

委員長

桑原 節子 (医療法人社団 秀幸会 千葉スマイル歯科&矯正歯科 理事)

がん医療は大きな変革の時を迎えている。がんの診断・治療には、重厚な放射線診断、治療機器の他、内視鏡手術やロボット支援手術の導入も進んでいる。また、がん研究の成果に基づき、がんの病態の解明が進み、個々の患者について細胞がん化のパスウェイが明らかにされ、その情報に基づく分子標的治療も進化している。一方で、がん対策基本法、がん対策推進計画の前後で患者・家族の悩みや負担についての全国調査を行った結果では、がんの薬物療法に関わる悩みや負担が顕著に増加していた。手術治療や放射線治療が、それぞれ縮小手術やピンポイント照射を目指しているなかで、薬物療法は、術後補助薬物療法が一般的になり、医療現場が十分には熟知していない分子標的薬が増え、多くの患者が通院で薬物療法を受けるという状況が生まれているためと考えられる。従って、がん薬物療法の副作用軽減のための支持療法の普及も現代のがん医療にとっての急務の課題である。

このような状況に対応するためには、がんという病変を治療するとともに、患者・家族の心のケアや暮らしにまで配慮しながら治療にあたるという社会的な全人的医療が重要となる。そこでその両者を実現するためには、基礎医学者や臨床医とともに、治療や心のケアや暮らしの支援を担当する様々な職種との協働作業を実践するための多職種チーム医療が一つの解決策となる。

しかるに、我が国では、がん医療に習熟した医師以外の医療スタッフが不足している。具体的には、看護師・薬剤師・検査技師・リハビリテーション技師・臨床心理士・栄養士・ソーシャルワーカーなどである。医師のレジデント制度や研修制度によって、がん医療に習熟した医師の育成は従前から試みられ、一定の成果を上げているが、医師以外の職種についての養成プログラムはあまり試みがされていない現状である。

がん研究振興財団では、がん医療に携わる基礎医学者や医師以外の医療スタッフを対象とした看護師・薬剤師・技師等海外研修制度を運用してきた。

2023年度には、計2名が本プログラムによって海外研修を受けた。2名の職種は、診療放射線技師が1名、言語聴覚士が1名で、所属は、山口大学医学部附属病院、防衛医科大学校が各1名であった。主な研修先はオーストラリア、ニュージーランドが各1名であり、著名な医療機関での研修と関連学会への出席というスケジュールが一般的で、研修期間は1週間程度であった。こうした研修報告の一部は、財団ホームページ及び機関誌「加仁」にも寄稿されており、海外施設での研修を通して、自らの能力を高め、所属施設のレベル向上に役立っている様子が見て取れる。

現在の助成制度は年間約5名を公募し、公募要項は財団のホームページで入手可能である。助成対象者に対しては、所属長の推薦が必要で研修に必要な語学力を有し、研修先からの招聘状があることなどといった条件が付されている。委員会では応募書類について審議し、助成の可否を決定しているが、現在の委員は別表の2名で構成されている。

本事業の課題は、全国的な周知が十分ではなく、また研修希望があったとしても、所属医療機関が忙しい日常診療の間を縫って職員に海外研修を受けさせることが容易ではない点である。しかし、昨今の

がん医療における大きな変革の中で、医療機関の意識変革も進み、がん医療における多職種チーム医療の重要性が認識されるようになった。その中で、すべての職種を対象に海外研修を支援する助成制度は国内には例がなく、また規模的にも本制度が最大である。今後、本助成制度がより広く活用され、一人でも多くのがん医療に習熟した医療スタッフが養成されることを期待したい。

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会

	氏名	所属
委員長	桑原 節子	医療法人社団 秀幸会 千葉スマイル歯科&矯正歯科 理事
委員	竹内 朋子	東京医療保健大学大学院 教授

2023年度 コメディカル海外研修助成金受賞者

	部門	氏名	所属	研修施設・国際会議等	研修国・都市
1	放	向谷 航	山口大学医学部附属病院	European Society for Radiotherapy & Oncology (ESTRO2023)	オーストリア・ウィーン
2	言	谷合 信一	防衛医科大学校	32nd World Congress of the IALP	ニュージーランド・オークランド

向谷 航

●山口大学医学部附属病院



研修施設等／渡航期間

European Society for Radiotherapy & Oncology (ESTRO2023)
Messe Wien Exhibition & Congress Centre (ウィーン・オーストリア) / 2023.5.10 ~ 5.19

研修内容

ESTRO2023 に参加し、即時適応放射線治療のための深層学習を使用した臓器の自動輪郭抽出に関する研究報告を口述発表した。本研究では新しい深層学習の手法を採用することで、臓器の自動輪郭抽出の精度向上を確認し、開発した深層学習モデルの有用性を明らかにした。深層学習を用いた放射線治療については国際的にも注目されており、研究成果の発表を通じて、多くの研究者とディスカッションを行い、有意義な学会参加となった。今回の経験を今後の研究活動に役立てたいと考えている。

谷合 信一

●防衛医科大学校



研修施設等／渡航期間

32nd World congress of the IALP
場所：The Aotea Centre (オークランド・ニュージーランド) / 2023.8.19 ~ 8.25

研修内容

世界の言語聴覚士や耳鼻科医が集う学会にて、「経口的咽喉頭部分切除術患者に対する術前呼吸抵抗負荷トレーニングの効果」のポスター発表を行った。咽喉頭癌切除術を受ける予定で術後嚥下障害発生リスクの高い患者に対し、術前に呼吸筋訓練を実施し効果を示した研究である。海外研究者から質問とコメントを頂きディスカッションすることにより、今後の研究推進に向けて貴重な情報交換が出来た。この経験を活かし言語聴覚士としてさらに研究を進めていきたい。

事業実績

1984～2023

I. がん情報提供支援事業

- 患者本位の「がん情報サイト」

II. 若手研究者の育成事業

- リサーチ・レジデント制度
- シニア・リサーチフェロー制度
- トランスレーショナル・リサーチ (TR) 研究奨励助成

III. 研究助成事業

- がん研究助成
- がんサバイバーシップ研究助成
- HOPE 研究助成
- 特別寄付金に伴う研究助成

IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

- 海外派遣研究助成
- 外国人研究者の招へい
- 日本人研究者の外国への派遣
- 外国への研究委託

V. 技術者研修助成事業

- 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

VI. 研究成果等普及啓発事業

- 国際がん研究シンポジウムの開催
- がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催
- 国際がん看護セミナーの開催
- 市民公開講演会の開催
- がん患者学会の開催
- 公開セミナーの開催
- がん予防展・講演会の開催 (JKA 自転車補助事業)
- レクチャーシップ (国際がん研究講演会) の開催

VII. 広報活動事業

I. がん情報提供支援事業

■ 患者本位の「がん情報サイト」

患者さんやそのご家族が信頼できる最新のがん情報が検索でき、利用しやすいシステムとして製薬企業の協力により開設。

(詳細は「がん情報提供支援事業運営委員会報告」を参照)

2021.10. 1 非小細胞肺癌 公開

2022. 7. 1 血液がん 公開

2023. 1. 1 乳がん・子宮頸がん 公開

公開情報からの検索システム構築

2023.10.23 全12領域の企業治験情報（総ID数約500件）の登録
医療機関別治験情報公開

2024. 1.22 小児及びAYA世代のがん、希少がん、原発不明がん、
支持療法や緩和ケアの治験情報公開



II. 若手研究者の育成事業

■ リサーチ・レジデント制度

リサーチ・レジデントは「対がん10か年総合戦略（1984年～）」における研究推進事業の一環として、がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、将来のわが国のがん研究の中核となる若手研究者をがん研究振興財団職員の身分で育成。

年度	国による対がん戦略	人数
1984～1993	対がん10か年総合戦略	453
1994～2003	がん克服新10か年戦略	753
2004～2013	第3次対がん10か年総合戦略	707
2014	がん研究10か年戦略	49
	のべ総数	1,962

■ シニア・リサーチフェロー制度

2014（H26）年からの「がん研究10か年戦略」に基づくリサーチ・レジデントと異なる上級研究員を育成するため、がん研究振興財団の事業として実施。

年度	医学	歯学	理学	薬学	農学	その他	計
2015～2021	29	0	4	0	0	6	39

■ トランスレーショナル・リサーチ（TR）研究奨励助成

がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床につなぐトランスレーショナル・リサーチの若手研究者を育成することを目的に、研究奨励助成金を交付。

年度	医学	歯学	理学	薬学	農学	その他	計
2022	2	0	0	1	2	0	5
2023	1		1	1			3

Ⅲ. 研究助成事業

■ がん研究助成

わが国のがん研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究に対して、昭和43年、当財団創設以来毎年研究助成金を交付。

がん研究助成は、財団に寄せられた一般の方々からの貴重な浄財を以て実施している事業で国の各種研究助成金や、各種財団の研究助成金とは一線を画する。

● がん研究助成金実績

昭和43年度から毎年助成しており、交付者数は平成29年度までに1,000名を超える実績となっているため、以下の実績を抜粋して掲載する。

がん研究助成金交付実績(2014(H26)～2023(R5)年の10年間)

年度 (回)	2014 (47)	2015 (48)	2016 (49)	2017 (50)	2018 (51)	2019 (52)	2020 (53)	2021 (54)	2022 (55)	2023 (56)
交付件数	24	23	23	28	32	30	29	30	27	25

■ がんサバイバーシップ研究助成

2014(H26)年からの「がん研究10か年戦略」に基づく「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築」を目指した研究課題に関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を交付。

年度	医学	歯学	理学	薬学	看護学	その他	計
2015(H27)	2				3	11	16
2016(H28)	4	1			1	3	9
2017(H29)	5				1	5	11
2018(H30)	5	1	1		1	2	10
2019(R1)	4		2		2	2	10
2020(R2)	7				1	2	10
※2021(R3)		1	1		2	1	5
※2022(R4)	1	1			1	2	5
※2023(R5)		2			1	1	4

※令和3年度から研究助成金の募集はがん研究助成金に統合。

■ HOPE研究助成

1. 個別研究課題

2014(H26)年からの「がん研究10か年戦略」に基づく研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を交付。

年度	医学	歯学	理学	薬学	その他	計
2015(H27)	1	1			3	5
2016(H28)		1	1	1	2	5

2. 海外派遣支援

2014（H26）年からの「がん研究10か年戦略」に基づく研究事業の一環として、がん研究の進歩・発展に貢献することが期待される研究者を外国の研究機関及び大学等に派遣するための助成金を交付。

年度	派遣先研究機関
2016	New York University Langone Medical Center Laura and Isaac Perlmutter Cancer Center
	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center

■ 特別寄付金に伴う研究助成

個人又は団体から使途の特定がなされる「特別寄付金」規程に基づく研究助成金を交付。

年度	医師	研究課題
2015（H27）	1	大腸ポリペクトミーに於いての抗凝固剤を服用されている方へのコールドポリペクトミーの有用性の検証
2016（H28）	1	超音波ガイド下経気管支針生検における新型細径針の有用性に関するランダム化比較試験

IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

■ 海外派遣研究助成

がんを専門分野とする医師および研究者が行う海外での研究の発表・協議、施設調査、研究資料の収集などの先進的な研究活動に対して、旅費等の助成金交付。

（過去7年の実績）

年度	派遣者数
2017（H29）	27
2018（H30）	20
2019（R1）	16
2020（R2）	新型コロナウイルス感染拡大のため中止
2021（R3）	
2022（R4）	0
2023（R5）	8

■ 外国人研究者の招へい

諸外国の第一線の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者とともに国際共同研究を実施。

年度	招へい数
1984～1993（S59～H5）	351
1994～2003（H6～H15）	280
2004～2013（H16～H25）	144
2014（H26）	1
計	776

■ 日本人研究者の外国への派遣

我が国のがん研究者を外国の大学・研究機関などに派遣し、外国の研究者とともにがん最前線の研究を実施。

年度	派遣者数
1984～1993 (S59～H5)	280
1994～2003 (H6～H15)	356
2004～2013 (H16～H25)	202
2014 (H26)	3
計	841

■ 外国への研究委託

国内では実施の困難な研究などを、国際的に顕著な実績を有する外国の研究機関に委託。

年度	テーマ数
1984～1993 (S59～H5)	42
1994～2003 (H6～H15)	25
2004～2007 (H16～H19)	3
計	70

V. 技術者研修助成事業

■ 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

がんを専門分野とする看護師・薬剤師・放射線技師等のメディカルスタッフに対し、海外での先進的な研修に対して旅費等の助成金を交付。

年度	看護	放射線	臨床検査	薬剤	SW	理学療法士	言語聴覚士	計
2000～2003 (H12～H15)	28	11	8	10	0	0		57
2004～2013 (H16～H25)	38	52	5	37	1	3		136
2014 (H26)	2	5	0	1	0	1		9
2015 (H27)	4	2	1	1	0	1		9
2016 (H28)	0	6	0	2	0	1		9
2017 (H29)	2	5	0	1	0	2		10
2018 (H30)	3	6	0	0	0	1		10
2019 (R1)	2	4	0	1	0	0		7
2020 (R2), 2021 (R3)	新型コロナウイルス感染拡大のため中止							
2022 (R4)	0							
2023 (R5)		1					1	2

VI. 研究成果等普及啓発事業

■ 国際がん研究シンポジウムの開催

世界の著名ながん研究者を招いて日本人研究者とのシンポジウムを開催。

年度	テーマ
1988～1993	肺がんの基礎と臨床 尿路性器がんの基礎と臨床
	肝臓がんの基礎と臨床 膵・胆道がんの基礎と臨床
	多重がんの基礎と臨床 食道がんの基礎と臨床
1994～2003	肺がんの基礎と臨床 頭頸部がんの基礎と臨床
	大腸がんの基礎と臨床 胃がんの基礎と臨床
	脳腫瘍の基礎と臨床 乳がんの基礎と臨床
	がん検診－過去・現状・未来－
	がん性疼痛治療、緩和医療と精神腫瘍学－現状と将来の展望－
	血液腫瘍の診断と治療の最近の進歩
	膵臓がんの基礎と臨床－最近の進歩－
2004～2013	胃がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	前立腺がんをめぐる課題と挑戦
	感染、がんと予防
	がん根治手術後の生理学的変化と QOL
	最近の放射線腫瘍学：技術の進歩と臨床導入への研究
	頭頸部・食道がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	科学の発展を乳癌治療へ～新たなる挑戦～
	悪性脳腫瘍～現状と展望～
	放射線とがん
	世界のがん研究は今～次期対がん戦略に向けた課題～
2014～2018	希少がん：望ましい医療・研究体制を探る
	難治がん克服に向けた最新の治療戦略
	次世代免疫療法・ゲノム医療
	小児および AYA がん
2019・2020	新型コロナウイルス感染拡大のため中止
2021	全ゲノム解析が変革するがん研究・がん医療（会場とオンラインのハイブリッド開催）
2022	WGS, Long-read and Beyond（会場とオンラインのハイブリッド開催）
2023	次世代の抗がん剤開発（会場とオンラインのハイブリッド開催）

■ がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

「がんサバイバーシップ研究助成金」交付者の研究成果報告と、がんサバイバーシップに関する正しい知識の普及を目的としたセミナーの開催。

年度	テーマ
2016	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーシップ研究の射程と国内外の展開
2017	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：今日からできるセルフケア
2018	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：親の私のがんになったとき～知りたい！子どもサポート
2019	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：ケア提供者としてがんサバイバーを支えるということ
2020	がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。
2021	がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。
2022	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 がんサバイバーシップ研究助成金過去採択者の継続発展研究報告
2023	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して

■ 国際がん看護セミナーの開催

がん患者とその家族を支える看護・医療の向上を図るための、国内外のがん看護関係者とのセミナー

年度	テーマ
2000～2003	がん看護の実践力の向上をめざして がんと向き合う人を支える
	がん看護領域の教育と実践 がんと向き合う人を支える part II
2004～2013	がん患者の自律を目指して 変革するがん看護
	これからのがん看護 変革するがん看護 part II
	これからのがん看護 part II
	がん医療における外来看護に求められる役割 part I
	がん医療における外来看護に求められる役割 part II
	がん医療における継続したがん看護の充実 part I
	がん医療における継続したがん看護の充実 part II
高齢者のがん“その人らしさを支えるがん看護と研究”～アジアの国々から～	
2014	がん医療の質向上を担うがん看護の「現在」と「発展の10年度」を問う

■ 市民公開講演会の開催

年度	テーマ
2008～2013	がん撲滅を目指して
	がん撲滅に向けた新たな挑戦－これからのがん研究の若き担い手へのメッセージ－
	がん撲滅に向けた新たな挑戦－がん研究の明日を担う方々へ－
	がん克服に向けた新たな挑戦－がん研究の明日を担う方々へ－
	がん克服に向けた新たな挑戦－がん研究はがん医療の未来へ繋ぐ－
	発がん機序からがん予防まで－研究成果と課題－
2014	がん研究と市民社会～高齢者がんとサバイバーシップ～

■ がん患者学会の開催

年度	
2015	(一社) 全国がん患者団体連合会と共催

■ 公開セミナーの開催

年度	テーマ
2015	「高齢者のがん」本当に今の治療で良いのか

■ がん予防展・講演会の開催（JKA自転車補助事業）

年度	開催会場数等
1987～1993	会場数：78 参加総数：399,055人
1994～2003	会場数：79 参加総数：248,519人
2004～2009	会場数：72 参加総数：500,425人

■ レクチャーシップ（国際がん研究講演会）の開催

年度	主な講演者名
1984～1993	ポール・A・マークス博士（アメリカ）
	ロレンソ・トマティス博士（フランス）
	クライス・ラメール博士（スウェーデン）
	サー・ウオルター・ボドマー博士（イギリス）
	ハラルド・ツール・ハウゼン博士（西ドイツ）
	ポール・H・M・ローマン博士（オランダ）
	ニコライ・N・トラベツニコフ博士（ソ連）
	A・J・マクマイケル博士（オーストラリア）
1994～2003	リチャード・H・アダムソン博士（アメリカ）
	ジルベール・ド・マシア博士（フランス）
	アンダーズ・ゼッターバーグ博士（スウェーデン）
	テランス・H・ラビッツ博士（イギリス）
	マンフレッド・F・ラジェウスキー博士（ドイツ）
	カリ・アリタロ博士（フィンランド）
	ロジャー・ワイル博士（スイス）
	ロルフ・シュルート・ハルマン博士（オーストラリア）
	アラン・バーンスタイン博士（カナダ）
	ツアン・ユーホイ博士（中国）
ジェガブ・パーク博士（韓国）	
2004～2009	カリ・ヘミンキ博士（ドイツ）
	スーザン・バンド・ホーウィッツ博士（アメリカ）
	アーサー・リッグス博士（アメリカ）
	バーネット・クレマー博士（アメリカ）
	カルロ・クローチェ博士（アメリカ）
	ローレンス・マーネット博士（アメリカ）
	ジョン・シラー博士（アメリカ）

Ⅶ. 広報活動事業

● 正しいがん知識の普及・がん研究者等への資料の提供

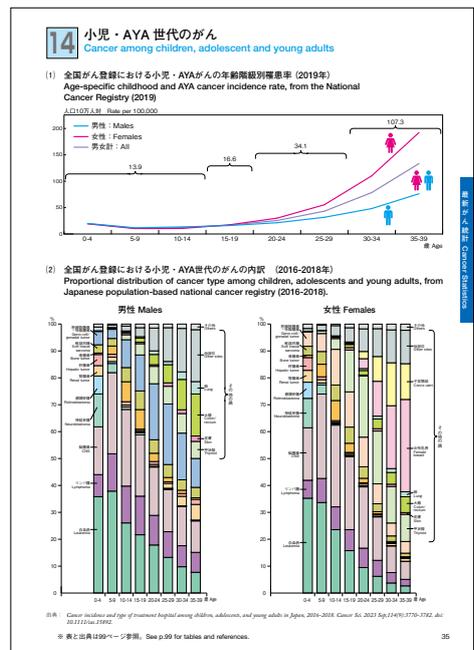
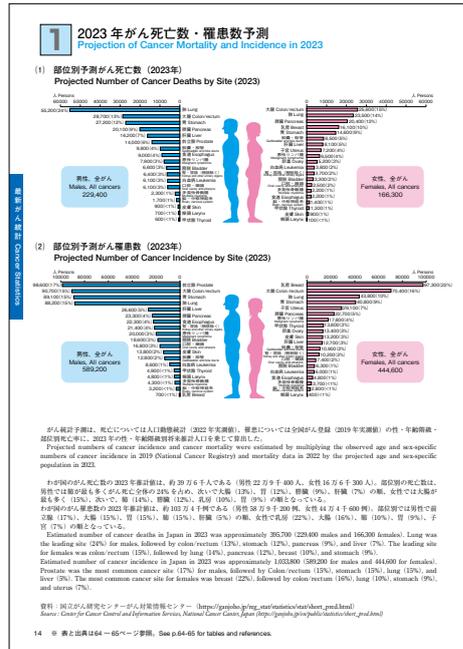
一般の方々にも理解できるがん研究に関する最新情報の提供及びがん予防の知識などを各自治体、がん診療連携拠点病院、研究機関等などのほか、全国の公立中学校にも広く情報提供。

(1) 広報活動

①がんの統計2024



本書は“わかりやすいがん統計本”として1974（昭和49）年から厚生労働省、国立がん研究センター、大阪国際がんセンター、弘前大学医学部付属病院、（公財）放射線影響研究所等の協力により、英訳を含めて編集した貴重な資料です。（年1回発刊）



②がんを防ぐための新12か条および12か条ハンドブック



この冊子は、1978（昭和53）年から「がん予防の12箇条」としてがん予防のための生活改善情報を提供してきたものを、日本人を対象とした疫学調査などの科学的な研究で明らかにされた確かな証拠をもとに改訂を重ね、現在に至っています。



「がんを防ぐための新12か条」を

- 喫煙とがん
- 飲酒とがん
- 食事とがん
- 運動・体形とがん
- 感染とがん
- 検診・診療とがん
- 情報とがん

の7項目に分け、詳しく解説しました。

③やさしいがんの知識・がん検診（一般財団法人日本宝くじ協会の助成により作成）



④その他



(2) これまでの広報活動実績

年度	事業内容
1985～1993	がんの統計 (1974～)
	がんを防ぐための12か条 (1978～)
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	対がん戦略PRポスター、カレンダー
	16ミリ映画「がんに挑む」「がんから身を守るポイント」の作成 他
1994～2003	がんの統計
	がんを防ぐための12か条
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	がんどう付き合うか (総論・肺がん・胃がん)
	がん克服戦略PRポスター、禁煙指導用ポスター 他
2004～2013	がんの統計
	がんを防ぐための12か条
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	がんどう付き合うか (乳がん・肝がん・大腸がん・外来抗がん剤治療・子宮がん・前立腺がん・放射線治療・がんと食事・卵巣がん・食道がん・膵臓がん・緩和ケア・がんのおはなし・がん暮らし・口腔がん・子どものがん)
	予防できる「子宮頸がん」「大腸がん」
	早期発見で治そう「乳がん」
	「たばこ」がいらない、これだけの理由。 他
2014	がんの統計
	予防できる「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」
	みんなで考えよう「乳がん」
	やさしいがんの知識「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ①喫煙とがん②飲酒とがん③食事とがん
	がん治療前の食事のヒント改訂版
	食事に困った時のヒント最新版
2015	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん」「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」
2016	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん」「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ④運動・体形とがん ⑤感染とがん ⑦情報とがん

年度	事業内容
2017	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん・子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ⑥検診とがん
	こころとからだを支える がんサバイバーのための かんたんおいしいレシピ
	「痛み止めの薬」のやさしい知識
	知っておきたい放射線治療
2018	がんの統計
	がん治療中の食事サポートブック2018
	がん検診
	やさしいがんの知識2018
	がん治療と食生活～栄養士・歯科医・看護師からのヒント～
	こころとからだを支える がんサバイバーのための かんたんおいしいレシピ②
2019	がんの統計
	やさしいがんの知識2019
	がん検診
	がん治療における口腔支持療法のための口腔乾燥症対応マニュアル
	多職種から学ぶ：がん看護の基礎（食事を支えるケア編）
2020	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条ハンドブック
	やさしいがんの知識2020
	がん検診2020
	がん治療中の食事サポートブック2020
	がん治療前の食事のヒント改訂版
2021	がんの統計
	改訂版がん治療と食生活～栄養士・看護師・歯科医からのヒント
	やさしいがんの知識2021
	がん検診2021
	がんサバイバーのためのかんたんレシピ2022
2022	がんの統計
	やさしいがんの知識2022
	がん検診2022
	知っておきたい放射線治療 改訂版
	がん治療中の食事サポートブック2023
	がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット
2023	がんの統計
	やさしいがんの知識2023
	がん検診2023
	がんターミナル期をご自宅で過ごす方の生活と食事

令和6年度 事業計画

公益財団法人がん研究振興財団令和6年度事業計画を掲載しました。
本誌に掲載しております「令和5年度事業実績」と併せてご確認下さい。

公益財団法人がん研究振興財団

令和6年度事業計画

1. 研究助成事業

(1) がん研究助成

- ① がんに関する研究に従事する日本人研究者又はそのグループを対象に研究助成金を贈呈する。
(57回目の助成)
- ② 看護師、薬剤師、技師（放射線・検査等）、管理栄養士、放射線医学物理士、実験動物関係技術者、臨床心理士等幅広く対象とし、それぞれの職種における実践的研究に対し助成する。
- ③ 「充実したがんサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」の課題解決に向けた研究に対し助成する。

(2) 海外派遣研究助成

がんに関する国際会議、国際学会への出席者に対して助成を行う。
研究費等での対応が困難な若手研究者を対象とする。

2. 関係団体助成事業

UICC（国際対がん連合）の事業に対して協力助成を行い、世界、アジア等のがん対策に貢献する。

3. 技術者研修助成事業

国際交流を推進し、がん看護等の知識・技術の向上を図るため、メディカルスタッフの海外研修留学等に対して助成を行ってきており、今年度で19年目を迎える。対象は、看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、臨床検査技師、ソーシャルワーカー等とする。

4. がんになっても生きる希望を持てる事業（HOPE事業）

「がん研究10か年戦略」による研究支援事業を継続的に推進していくため、幅広い研究分野における柔軟な発想を持った人材を研究領域に取込むための戦略的育成等の研究支援を行う。

5. 「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」課題解決に向けた支援事業 (がんサバイバーシップ研究支援事業)

「がん研究 10 か年戦略」の具体的研究事項として「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」が課題とされており、患者本人や家族が本来の生活の場所（家庭、職場、学校、地域コミュニティなど）で暮らしていく過程で直面する様々な課題解決に関する研究の支援を行う。

6. 多様化する情報ニーズに対応するためのエビデンスに基づいた国民への薬物療法等の情報提供支援事業（がん情報提供支援事業）

科学的根拠に基づく情報を迅速に提供するため、臨床試験情報及び薬物療法プロトコル情報等に関する諸問題や個別目標に直接寄与するための事業を支援する。

7. 研究成果等普及啓発事業

シンポジウムの開催及びがん研究の成果を国民にフィードバックする観点から各種情報媒体を活用した普及啓発を行う。

8. 広報活動事業

がん研究の成果を国民にフィードバックするため、ホームページの充実やパンフレット等の作成を行い、全国の学校や保健所・診療機関等に配布し、がん予防及びがんの正しい知識のわかりやすい情報提供を行う。

ご寄付 芳名録

令和5年度におきましても、多くの方々からご寄付をいただき、誠に有難うございました。ここにご芳名をご披露させていただきます。

これらのご寄付は、がんで亡くなられた方のご遺志を活かすために寄せられたもの、がんと闘ったことのあるご本人から寄せられたもの、そして、その他一日も早くがんの克服されることを願う方々から寄せられたものです。

当財団と致しましては、貴重なご芳志にお報いするため、がん克服を目指す研究や診療の進歩に有効に活用させていただきますことをお願いして、お礼に代えさせていただきます。

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀田 知光

令和5年度（令和5年4月1日～令和6年3月31日）

住 所	氏 名
兵庫県	池 田 恢 様
広島県	野 中 俊 志 様
大阪府	松 原 都 築 様

（ご承諾を頂いた方のみ受付順に掲載しています）
他 総件数 26 件

ご寄付に添えられたお言葉の一部を
紹介させていただきます。

- がんでお亡くなりました故人のご意向によりご寄付をさせていただきます。
- 沢山の方からのお気持ちが集まったものです何卒宜しくお願い致します。
- 少しでもがんの治療が前進する事を願っております。
- 感謝の気持ちとがん征圧にわずかでも協力できればと思いい寄付をいたします。

～ご厚志ありがとうございました～

ご寄付について お問い合わせ先

お問い合わせは下記までお願い致します。ご寄付の申し込みを希望される方には寄付申込書、銀行及び郵便局の振込用紙（払込手数料は不要）、特定公益増進法人であることの証明書（寄付金控除等の税法上の特典が受けられる）等の関係資料をお送りさせていただきます。

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階

公益財団法人 がん研究振興財団

TEL 03(6228)7297 FAX 03(6228)7298

E-mail : info@fpcr.or.jp

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/contribution.html>

公益財団法人がん研究振興財団 役員

令和6年4月1日

会 長	垣添 忠生	(公益財団法人日本対がん協会 会長)
理 事 長	堀田 知光	(国立研究開発法人国立がん研究センター 名誉総長)
専務理事	石塚 正敏	(公益財団法人がん研究振興財団 専務理事)
理 事	上田 龍三	(名古屋大学 特任教授)
同	佐野 武	(公益財団法人がん研究会 がん研有明病院 病院長)
同	関谷 剛男	(公益財団法人高松宮妃癌研究基金 理事長)
同	田中 利彦	(田中綜合法律事務所 代表弁護士)
同	中釜 齊	(国立研究開発法人国立がん研究センター 理事長)
同	村上 善則	(日本医科大学 先端医学研究所 分子生物学部門 特命教授)
監 事	亀口 政史	(亀口公認会計士事務所 所長)
顧 問	荒蒔 康一郎	(公益財団法人がん研究振興財団 前会長)

公益財団法人がん研究振興財団 評議員

令和6年4月1日

評 議 員	木村 政之	(一般社団法人偽造医薬品等情報センター 代表理事)
同	久保田 政一	(一般社団法人日本経済団体連合会 副会長・事務総長)
同	坂元 亨宇	(国際医療福祉大学 医学部長／慶應義塾大学 名誉教授)
同	澁谷 正史	(上武大学 学長)
同	菅野 純夫	(一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事)
同	津金 昌一郎	(国際医療福祉大学大学院 教授)
同	野田 哲生	(公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事 研究所長)
同	宮園 浩平	(東京大学大学院 教授)
同	森内 みね子	(公益社団法人日本看護協会 常任理事)

あとがき

歴史ある機関誌「加仁」のあとがきを今号から担当することになりました。過去の号はどのようなものであったか紙面の構成や内容を遡ることになりました。

創刊初期は季刊として年3回程度発行していたようです。また「随想」、がんを克服された方の「冬瓜の記」、医師や研究者に着目した「横顔」、全国の「がんセンターめぐり」、書籍などの「作品紹介」、読者からの「質問コーナー」など一般の方々を対象としたソフトな記事を目指し「がん」について知っていただく工夫が随所に見られました。

「加仁」の歴史の重みとともに先の担当者の「加仁」への熱い思い・苦労をうかがい知るところとなりました。

さて、「加仁」51号は、令和6年度からスタートする4大臣合意の「新がん研究10か年戦略（第5次）」の紹介を目玉として構成しています。

この新がん研究10か年戦略は、第4期がん対策推進基本計画（令和5年3月閣議決定）の目標を実現するため、わが国が進めるがん研究の今後の方向性と具体的な研究事項について定めたもので、政府としてがん研究を全力で取り組むことを確認したものです。

「巻頭言」では、「新がん研究10か年戦略（第5次）」について中釜先生にわかりやすく解説をいただいています。

また「トピックス」では、厚生労働省から発表された「新がん研究10か年戦略（第5次）」の概要を転載いたしました。

「特集」では、2つのシンポジウム・発表会等の開催状況についてご報告いただきました。

1つ目は、3月16日に「次世代の抗がん剤開発」をテーマとして国立がん研究センターにおいて開催されました「がん研究シンポジウム」について、同センター副院長の山本 昇組織委員長からご報告いただきました。

2つ目は、2月16日に国立がん研究センターにおいて開催されました「がんサバイバーシップ研究成果発表会」及び「がんサバイバーシップ研究セミナー」について、亀井評価委員長と石塚専務理事からそれぞれご報告いただきました。

「令和5年度事業実績」では、当財団の核となる6つの委員会の委員長から事業の内容と委員会の活動状況を詳細にご報告いただきました。

がん情報提供支援事業運営委員会報告にもありますように、当財団の柱の1つである「がん情報提供支援事業」では、開発中の新薬の臨床試験情報を、がんの患者・家族が検索し易いように構築した、患者本位の「がん情報サイト」としてホームページから発信しています。

「加仁」が創刊された時代からは想像もつかない程の情報技術の進化により、現在では膨大な情報の中から瞬時に必要な情報を得られるようになりました。

そのような便利な時代になりましたが、手に取ってページを開く紙媒体ならではの温かみのある伝え方もあるのではと思います。

今後とも、広く皆様に愛されるような機関誌「加仁」となりますよう内容の充実を務めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に今号作成にあたりましてご協力いただきました多くの関係者の皆様にお礼申し上げます。今後とも当財団事業へのご理解・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(H. S)

か仁

第51号 2024

令和6年4月発行

編集

代表 堀田 知光

発行

公益財団法人 がん研究振興財団

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8

新京橋ビル5階

TEL 03(6228)7297

FAX 03(6228)7298

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>

全国がんセンター協議会加盟施設一覧

(2019年9月現在)

北海道がんセンター	〒003-0804 札幌市白石区菊水4条 2-3-54	☎(011)811-9111
青森県立中央病院	〒030-8553 青森市東造道 2-1-1	☎(017)726-8111
岩手県立中央病院	〒020-0066 盛岡市上田 1-4-1	☎(019)653-1151
宮城県立がんセンター	〒981-1293 名取市愛島塩手字野田山 47-1	☎(022)384-3151
山形県立中央病院	〒990-2292 山形市大字青柳 1800	☎(023)685-2626
茨城県立中央病院	〒309-1793 笠間市鯉淵 6528	☎(0296)77-1121
栃木県立がんセンター	〒320-0834 宇都宮市陽南 4-9-13	☎(028)658-5151
群馬県立がんセンター	〒373-8550 太田市高林西町 617-1	☎(0276)38-0771
埼玉県立がんセンター	〒362-0806 北足立郡伊奈町小室 780	☎(048)722-1111
国立がん研究センター東病院	〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1	☎(04)7133-1111
千葉県がんセンター	〒260-8717 千葉市中央区仁戸名町 666-2	☎(043)264-5431
国立がん研究センター中央病院	〒104-0045 中央区築地 5-1-1	☎(03)3542-2511
がん研有明病院	〒135-8550 江東区有明 3-8-31	☎(03)3520-0111
東京都立駒込病院	〒113-8677 文京区本駒込 3-18-22	☎(03)3823-2101
神奈川県立がんセンター	〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2	☎(045)520-2222
新潟県立がんセンター新潟病院	〒951-8566 新潟市中央区川岸町 2-15-3	☎(025)266-5111
富山県立中央病院	〒930-8550 富山市西長江 2-2-78	☎(076)424-1531
石川県立中央病院	〒920-8530 金沢市鞍月東 2-1	☎(076)237-8211
福井県立病院	〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1	☎(0776)54-5151
静岡県立静岡がんセンター	〒411-8777 駿東郡長泉町下長窪 1007	☎(055)989-5222
愛知県がんセンター	〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1	☎(052)762-6111
名古屋医療センター	〒460-0001 名古屋市中区三の丸 4-1-1	☎(052)951-1111
滋賀県立総合病院	〒524-8524 守山市守山 5-4-30	☎(077)582-5031
大阪医療センター	〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2-1-14	☎(06)6942-1331
大阪国際がんセンター	〒541-8567 大阪市中央区大手前 3-1-69	☎(06)6945-1181
兵庫県立がんセンター	〒673-8558 明石市北王子町 13-70	☎(078)929-1151
呉医療センター・中国がんセンター	〒737-0023 呉市青山町 3-1	☎(0823)22-3111
山口県立総合医療センター	〒747-8511 防府市大字大崎 10077	☎(0835)22-4411
四国がんセンター	〒791-0280 松山市南梅本町甲 160	☎(089)999-1111
九州がんセンター	〒811-1395 福岡市南区野多目 3-1-1	☎(092)541-3231
佐賀県医療センター好生館	〒840-8571 佐賀市嘉瀬町大字中原 400	☎(0952)24-2171
大分県立病院	〒870-8511 大分市豊饒 2-8-1	☎(097)546-7111

※全国がんセンター協議会HPより

全国がんセンター協議会に属しているこれらの施設は、がんの専門医を多数擁して、がんの診断と治療に積極的に取り組んでいます。

当財団の事業活動の多くは、皆様からの尊いご寄付により
支えられています。
皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げます。

がんを防ぐための **新** 12か条

あなたのライフスタイルをチェック
そして今日からチェンジ!!



- 1 条 たばこは吸わない
- 2 条 他人のたばこの煙を避ける
- 3 条 お酒はほどほどに
- 4 条 バランスのとれた食生活を
- 5 条 塩辛い食品は控えめに
- 6 条 野菜や果物は不足にならないように
- 7 条 適度に運動
- 8 条 適切な体重維持
- 9 条 ウイルスや細菌の感染予防と治療
- 10 条 定期的ながん検診を
- 11 条 身体の異常に気がいたら、すぐに受診を
- 12 条 正しいがん情報でがんを知ることから

発行 公益財団法人 がん研究振興財団
〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階
TEL 03 (6228) 7297
FAX 03 (6228) 7298
E-mail: info@fpcr.or.jp
ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>